



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	離島地域における超小規模高校の教育と地域おこし：羽幌町立北海道天売高等学校・天売島を事例に
Author(s)	高嶋，真之；岩瀬，優；大沼，春子 他
Citation	公教育システム研究, 16, 119-156
Issue Date	2017-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66627
Type	departmental bulletin paper
File Information	PESS_16_201706-5.pdf



離島地域における超小規模高校の教育と地域おこし ——羽幌町立北海道天売高等学校・天売島を事例に——

高嶋真之・岩瀬優・大沼春子・木村裕・寺本一平・平子裕・森田未希・篠原岳司

目次

第1章 本調査の概要	高嶋真之
1-1 問題背景と課題設定	
1-2 調査方法と報告書の構成	
第2章 北海道羽幌町の地域振興と教育政策	大沼春子・寺本一平
2-1 北海道羽幌町の概要	
2-2 羽幌町の財政状況と地域振興	
2-3 羽幌町教育施策	
2-4 小括	
第3章 北海道天売高等学校の教育実践	高嶋真之・岩瀬優・木村裕・平子裕・森田未希
3-1 天売島の概要	
3-2 北海道天売高等学校の概要	
3-3 北海道天売高等学校の特色ある教育と取り組み	
3-4 小括	
第4章 天売島の住民と地域おこし	木村裕・平子裕
4-1 天売島民への聞き取りによる島の現状	
4-2 一般社団法人おらが島活性化会議と天売島の活性化	
4-3 小括	
第5章 本調査のまとめ	高嶋真之

キーワード：小規模高校、市町村立高校、高校の魅力化、地域おこし

第1章 本調査の概要 (担当：高嶋真之)

1-1 問題背景と課題設定

近年、人口減少と少子高齢化が声高に叫ばれており、日本創生会議・人口減少問題検討分科会が「成長を続ける二一世紀のために「ストップ少子化・地方元気戦略」」(通称「増田レポート」)を発表して以降、「地方消滅」が現実味を帯び、関係者の危機感が高まっている。そのため現在、地方自治体では、将来の人口推計に沿って、教育・医療・福祉・交通などの生活に必要なインフラを維持するとともに、産業・雇用・観光の開発を通して、地域の維持・発展が目指されている。

教育に目を向けたとき、高校の存続は地域の存続に直結する重要な課題と言える。なぜなら、

若い世代が地方から都市へと移動する最初のきっかけが高校進学であり、これを機に、家族ごと移動する場合も少なくなく、それが周囲の人々への不安を呼び起こし、さらなる人口減少へとつながるといふ悪循環に陥ってしまうからである¹⁾。今日、高校魅力化で注目を集めている隠岐島前高校のある島根県海士町の山内道雄町長も、「そしてもうひとつ、絶対に守らなければならないものが、海士にはあります。隠岐島前高校です。……私たちがこつこつと続けてきた人口対策が、隠岐島前高校の統廃合一発で吹き飛んでしまいかねないのです。何としてでも隠岐島前高校は守り通さなければならない」²⁾と述べており、地域の維持・発展において高校の存在がいかに重要であるかがうかがえる。

しかしながら、地方を中心に高校の統廃合は進められ、ピーク時には 4000 校以上あった公立高校も 2016 年には 3589 校にまで減少しており、この傾向は今後も続くことが予想される。無論、北海道も例外ではなく、2006 年に北海道教育委員会が策定した「新たな高校教育に関する指針」に示された「望ましい学校規模」を基準に「公立高等学校配置計画」が示され、2016 年までに 43 校もの公立高校がなくなっている（276 校（2006 年）→233 校（2016 年））。そのため、地方では、地元の高校が統廃合の対象とならないよう、入学定員の充足が喫緊の課題となっており、経済的支援や町外からの通学支援・寮整備などを通して、道立高校を市町村が必死で守らねばならない事態になっている。

以上のように、今日、地方の公立高校はその重要さとは裏腹に、非常に厳しい状況に置かれているが、人口減少と少子高齢化が進む地方において、高校の「重要さ」は具体的にどのような点に見出せるのだろうか。本調査では、北海道天売高等学校（以下、「天売高校」と略記）を対象にして、この問いを検討していく。天売高校の全校生徒はわずか 5 人（2016 年 7 月現在）であり、いつ統廃合の対象となってもおかしくはない。もはや「小規模校」ではなく、それを超える「超小規模校」と呼ぶべき小さな高校である。それにもかかわらず、天売高校が羽幌町立の定時制普通科高校として長年維持され続けているのは、高校が地域に果たす役割と機能が大きく、どれほど小規模であったとしても地域から高校をなくしてはならないとする強い思いと、それを支える様々な取り組みがあるからだと考えられる。では一体、義務教育でもない超小規模高校を、北海道ではなく羽幌町が、なぜ／どのように維持し続けているのか。この点を、天売高校の教育実践や自治体・地域住民の取り組みから明らかにすることを通して、地域における高校の存在意義について検討していく。

1-2 調査方法と報告書の構成

本調査は、2016 年度北海道大学教育学部専門科目「学校教育実習」として実施され、講義担当者である篠原岳司准教授の他、岩瀬優・大沼春子・木村裕・寺本一平・平子裕・森田未希（教育学部 3 年）、眞鍋優志（教育学部 4 年）、長井裕史（教育学院修士課程 2 年）、高嶋真之（教育学院博士後期課程 1 年／学校教育実習 TA）が行った。本報告書は、学生が執筆したものを、篠原・高嶋が取りまとめて全体を調整することで、調査結果を共同で明らかにしたものである。

上記の課題を遂行するため、2016 年 5 月より事前学習に着手し、7 月に羽幌町・天売島でイン

¹ 山下祐介（2014）『地方消滅の罠——「増田レポート」と人口減少社会の正体』ちくま新書、pp.60-62

² 山内道雄（2007）『離島発 生き残るための 10 の戦略』生活人新書、pp.188-189

タビュー調査を行った。調査の概要は下の通りである（図表 1-1）³。その後、①羽幌町役場・羽幌町教育委員会、②天売高校、③一般社団法人おらが島活性化会議、の 3 つの班に分けて調査結果の分析・検討を行い、本報告書を作成している。

日付	調査対象者	場所
2016 年 7 月 13 日	・ 上田 智史 氏（北海道天売高等学校 校長） ・ 永田 秀次郎 氏（北海道天売高等学校 教頭）	北海道天売高等学校
	・ 齋藤 暢 氏（一般社団法人おらが島活性化会議 理事） ・ 坂本 学 氏（一般社団法人おらが島活性化会議 理事） ・ 宇佐美 彰規 氏（羽幌町地域おこし協力隊 天売島地区担当）	天売島研修センター
2016 年 7 月 14 日	・ A 氏（羽幌町役場 地域振興課） ・ B 氏（羽幌町役場 財政課） ・ C 氏（羽幌町教育委員会 社会教育課） ・ D 氏（羽幌町教育委員会 学校管理課）	羽幌町役場

図表 1-1 調査概要

本報告書の構成は、まず第 2 章にて、天売高校・天売島が属する北海道羽幌町全体の地域振興や教育政策を概観する。そして第 3 章にて、天売高校の教育実践を検討し、第 4 章にて、一般社団法人おらが島活性化会議の取り組みから住民による地域おこしを検討する。最後に、第 5 章にて、本調査で明らかになったことを整理し、地域における高校の存在意義について考察を加える。

第 2 章 北海道羽幌町の地域振興と教育政策

本章ではまず、天売高校・天売島が属する北海道羽幌町の概要を示し（1 節）、財政状況と地域振興策（2 節）、教育施策（3 節）を概観することで、現在の天売高校・天売島が置かれている社会的文脈を確認する。なお、ここでの記述は、羽幌町役場・教育委員会へのインタビュー調査や提供資料の他、羽幌町ホームページや公的文書を用いて行っている。

2-1 北海道羽幌町の概要

（担当：寺本一平）

北海道羽幌町は、北海道の留萌管内の中心に位置しており、南は苫前町、北は初山別村及び遠別町、東は天塩山地を隔てて幌加内町、西は日本海に面しており、日本海上には天売島・焼尻島がある（図表 2-1⁴）。総人口は 7,251 人、その内、天売島は 317 人、焼尻島は 207 人となっており（2017 年 3 月末）、全体的に 1970 年の国勢調査以降、減少傾向が続いている。

羽幌町の前身である羽幌村は苫前郡白志村を廃止して苫前村を分割する形で、1894 年 2 月に

³ この他、一部の調査参加者で、2016 年 9 月 18 日に天売高校の学校祭（天高祭）の見学を行っている。

⁴ 羽幌町 HP「まちの概要 | 羽幌町の紹介 | 羽幌町」

（URL：http://www.town.haboro.lg.jp/about/gaiyou.html）

誕生した。その後、本州各地から移住者が入植することで開拓が進められ、1921年に町制が施行されて現在の羽幌町となった。農業・漁業といった第一次産業を中心に発展し、1932年には国鉄羽幌線の開通、その後羽幌炭鉱の採炭開始、1955年に天売村、1959年に焼尻村との合併、湾岸整備等様々な取り組みが行われた。しかし、国のエネルギー改革の影響による羽幌炭鉱の閉山や国鉄羽幌線の廃止などに伴い人口が減少し、過疎化が進むこととなった。2004年には苫前町、初山別村との留萌3町村合併協議が行われたが不調により解散し、現在は羽幌町単独での「自立をめざすまちづくり」を進める一方、合併以外の広域連携も視野に入れ、様々な取り組みが行われている。



図表 2-1 羽幌町の位置

羽幌町の産業は、米・アスパラ・ミニトマトなどの農業、甘えび・ホタテ・ウニなどの漁業が中心である。農業部門では米が高評価を得ており、道外にも出荷されるようになってきている。一方、離農者も存在するが、機械化や農場の大規模化により、栽培を辞めた土地を違う農家が買い取って経営することで、土地余りを防いでいる。漁業部門では甘えびが日本一の水揚げ量を誇り、天売島のウニも高い評価を受けている。かつては数の子や身欠きニシン等の加工といった第二次産業も盛んであったが、ニシンが獲れなくなった影響もあり規模が縮小していった。現在は加工業の他に製造業、建設業の業者数も少なくなるなど第二次産業全体が減少傾向にあるが、漁師たち自身で獲れた魚などの加工を行うなどして対処している。また、セイコーマート（株セコマ）で販売されているソフトクリームの製造会社を企業誘致し、雇用創出を行っている。

この他、世界的にも珍しい海鳥と人間が共生している天売島、上質な羊肉である「焼尻めん羊」や様々な原生花が特徴の焼尻島、はぼろバラ園など、豊富な自然を活かした観光事業にも力をいれており、地域おこしの重要な一角を担っている。

2-2 羽幌町の財政状況と地域振興

（担当：大沼春子）

（1）財政状況

2014年度における羽幌町の一般会計決算は、下の通りである（図表 2-2）⁵。町の予算は約 60 億円である。このうち約 8 割は、毎年度、人件費や公債費として経常的に支出されている経費である。一般財源に占める経常的経費の比率を指標化したものである経常収支比率は、2014年度の羽幌町においては 82.3%であり、これは全国の市町村全体の 91.3%という数値を下回る結果となっている⁶。ただ、全国の数値を下回っているとはいえ、町として自由な裁量の利く予算は限られている。また、一般会計が負担する借金返済額を指標化した数値である実質公債費比率は、2014

⁵ 北海道羽幌町（2016）『町勢要覧資料編 2016』pp.22-23

⁶ 総務省『平成 26 年度 市町村決済カード 北海道』p.110、同『平成 26 年度 市町村普通会計決算の概要』p.2

年度において 10.4%である⁷。これは、「地方公共団体の財政の健全化に関する法律」において定められた、早期健全化基準である 25.0%は下回る数値であるが、全国市町村平均の 8.0%よりはわずかに上回っている⁸。健全化基準を下回っているとはいえ、財政状況が厳しいことに変わりはなく、今後も引き続き行財政改革を進めていく見通しである。

財政面における課題は以前から意識されていたことであり、2006 年に『自立と共生へのまちづくり計画』が作成されている。分野別にみると、財政面での課題が特に意識されているのは、年々増加する福祉関連や介護保険関連の予算である。しかし、助成対象者の範囲を縮小する方向へ変更する国の法改正により、それらの分野への国からの補助金は減る傾向にある。それに伴い、近年は、町の一般会計からの負担が増加している。

平成 26 年度一般会計決算

歳入	決算額	割合
町税	723,220	11.8
地方譲与税	54,581	0.9
利子割交付金	1,543	0.0
配当割交付金	3,210	0.1
株式等譲渡所得割交付金	1,711	0.0
地方消費税交付金	99,528	1.6
ゴルフ場利用税交付金	64	0.0
自動車取得税交付金	6,714	0.1
地方特例交付金	1,702	0.0
地方交付税	3,188,417	51.9
交通安全対策特別交付金	673	0.0
分担金及び負担金	1,453	0.0
使用料及び手数料	131,476	2.1
国庫支出金	433,685	7.1
道支出金	427,314	7.0
財産収入	39,273	0.6
寄附金	12,703	0.2
繰入金	93,249	1.5
繰越金	100,950	1.6
諸収入	177,133	2.9
町債	650,704	10.6
合 計	6,149,303	100

単位：千円，%

歳出	決算額	割合
議会費	52,641	0.9
総務費	427,162	7.0
民生費	1,070,638	17.7
衛生費	480,836	7.9
労働費	5,604	0.1
農林水産業費	279,799	4.6
商工費	338,686	5.6
土木費	739,713	12.2
消防費	447,847	7.4
教育費	380,470	6.3
災害復旧費	141,190	2.3
公債費	796,858	13.1
諸支出金	900,487	14.9
予備費	0	0.0
合 計	6,061,931	100.0

図表 2-2 羽幌町一般会計決算（2014 年度）

（2）地域振興

北海道の地方市町村が抱える共通の課題として、急速な少子高齢化や若者の都市部への流出、過疎化の進行、それに伴う経済の縮小や生活水準維持の困難性などがあげられる。様々な問題が顕在化する中、地方自治体は近年推進されてきた地方分権改革の流れの中で「個性を活かし自立した地方」というあり方を求められている⁹。このような情勢を背景に、羽幌町では「町民、議会、

⁷ 北海道羽幌町 HP「財政の健全化判断比率表の公表 | 行政情報 | 羽幌町」

(URL : <https://www.town.haboro.lg.jp/gyousei/zaisei/kenzenkakouhyou.html>)

⁸ 総務省『平成 26 年度 市町村普通会計決算の概要』p.2

⁹ 内閣府 HP「個性を活かし自立した地方をつくる～地方分権改革の総括と展望～：地方分権改革 - 内閣府」

(URL : <http://www.cao.go.jp/bunken-suishin/soukatsutotenbou/soukatsutotenbou-index.html>)

そして行政が一体となった「まちづくり」⁽¹⁰⁾が目指されており、『第 6 次羽幌町総合振興計画』で掲げられている 3 つの柱を目標に各分野の施策に取り組んでいくとしている。

①『第 6 次羽幌町総合振興計画（ほっとプラン）』⁽¹¹⁾の概要

『第 6 次羽幌町総合振興計画』は、変化する社会情勢に対応し、「安定的で持続的な行財政運営」を行うべく、羽幌町の町政執行において総合的な指針を示す最上位計画として位置づけられている。本計画は 2012 年度から 2021 年度までを目標年次とする 10 年計画となっている。「心と心をつなぐハートコミュニケーションはぼろ」を基本理念に、行政主導ではなく町民と行政、町民同士の連携・協力・直接対話による、「対話と協働のまちづくり」が掲げられている。この基本理念のもとに以下の 3 つの基本目標が設定され、長期的な展望にたった計画的な施策の推進が目指されている。

①地域の自然が育む豊かなまち

地域の資源や財産を保全し、環境を整備して自然との共生によるまちづくりをすすめていくと共に、適正な土地誘導と計画的なまちづくりを行っていくことで、安全で快適な住民生活の推進を図る。

②誰もが居場所と生きがいを持って暮らせるまち

誰もが健やかに安全・安心で生きがいのある暮らしができるよう保険、福祉、医療サービスの充実と健康づくりを進めると共に、地域活動の支援や生涯学習の充実、地域の文化の保存を行っていく。また、自主と自立の道へ向けて、町民と行政の課題の共有、町民の地域づくりへの参画、行政のスリム化などを通して、「地域住民と民間、行政の役割分担の明確化」を図っていく。

③安心して魅力的な田舎暮らしができるまち

環境問題への対処とともに、地域産業の基盤強化を図る。また、生活環境の整備・充実を進める。

また、町民アンケートやまちづくりはぼろ委員会などの意見を踏まえた上で、積極的かつ重点的に取り組むべき重点課題として、医療体制の充実・雇用の創出・産業の振興が挙げられている。この他にも、男性の独身率が高いことと、住宅が不足しているということも直近の課題となっている。後者については、「羽幌町民間賃貸集合住宅建設促進助成制度」を策定して住宅の新設を促すほか、町のホームページにおいて空き家情報を公開する「空き家バンク」という制度を設けており、効果的に住宅を確保していくことを目指している。

②『自立と共生へのまちづくり計画』⁽¹²⁾の概要

『自立と共生へのまちづくり計画』は、2006 年度に作成された。地方分権化の流れを受け、「自立と自主」のまちづくりを進めていくためのものである。国や地方の財政危機が深刻化する中、

¹⁰ 羽幌町 HP「町政執行方針 | 行政情報 | 羽幌町」

(URL : <http://www.town.haboro.lg.jp/gyousei/shisaku-plan/shikkou-housin.html>)

¹¹ 羽幌町 HP「第 6 次羽幌町総合振興計画ほっとプラン | 行政情報 | 羽幌町」

(URL : <http://www.town.haboro.lg.jp/gyousei/shisaku-plan/sougousinnkoueikaku-hottopran.html>)

¹² 羽幌町 HP「自立と共生へのまちづくり計画 | 行政情報 | 羽幌町」

(URL : <http://www.town.haboro.lg.jp/gyousei/shisaku-plan/jiritsu-kyousei.html>)

国による三位一体の改革により、地方交付税や国庫支出金などは大幅に減少傾向にある。町の普通会計に占めるこれらの依存財源の割合は、計画作成の段階である 2004 年度決算において約 8 割弱である。これに加え、羽幌町の人口は今後も減少していくと推計されており¹³、歳入の大幅な減少が見込まれる。近隣町村との合併も見送られる中で、ひとつの町として自立し、町の特徴を生かしたまちづくりをしていくためには、長期的な視野にたった思い切った見直しが重要になる。行政・住民・民間の役割と責任の分担を明確にし、公と民が協力していく形で行政のスリム化や公共サービスの見直し、施設利用料金などの値上げ、近隣町村との広域連携などを進めていくことを目指している。

実際にこの計画をもとに取り組みがなされてきており、町役場の課の再編や職員数の削減、指定管理というかたちでの民間企業への委託、施設利用料の値上げ、複数の事項における近隣町村との広域連携などが進められてきた。広域連携においては、事務事業の効率化や職員数の削減といった利点が挙げられる一方、事業の進みが遅くなることや自治体間の負担の差ができてしまうことなどの課題も見えてきている。なお、本計画の実施により住民の経済的負担は増加することとなるが、計画の具体的な実施においては相談のうで行われているため、これまでのところ住民からの不満は特にはないという。

③『羽幌町離島振興計画』¹⁴の概要

天売島・焼尻島の 2 つの離島を有する羽幌町では、『羽幌町離島振興計画』が策定されている。本計画は 2013 年度から 2022 年度を目標とする 10 年計画となっている。離島分野のまちづくり計画として位置づけられている。離島の持つ特性を活かした地域の活力再生に向けた島づくりの基本目標と、その実現へ向けた総合的な指針を示す役割を担っている。以下に示す 3 つの基本目標が計画の柱となっている。

①魅力ある漁業が営める島

島の基幹産業である漁業だが、担い手がいけないこと、資源が少なくなってきたことが課題となっている。

②安心して暮らせる島

島の人口の減少、少子高齢化が進む中、離島という地理的条件に起因する様々な生活上の不便や制約を解消し、持続的で安心できる生活環境を整えることが課題となっている。

③人がやって来る島

地域の活力維持のためには他地域のひととの積極的な交流も必要である。情報発信や島の資源の活用、環境整備などが課題となっている。

町としては、今住んでいる人が「ずっと住んでいたいと思える島」という点と、人が「訪れてみたいと思える島」という 2 つの観点を、島づくりにおいて持っている。また、天売島の「おらが島活性化会議」、焼尻島の「やぎしり振興計画」が、それぞれ一般社団法人として住民の手によ

¹³ 北海道羽幌町（2015）『羽幌町人口ビジョン』pp.11-14

¹⁴ 羽幌町 HP「羽幌町離島振興計画 | 行政情報 | 羽幌町」

（URL：http://www.town.haboro.lg.jp/gyousei/shisaku-plan/ritou_sinkoukeikaku.html）

る島づくりを進めており、行政としてはこれらの活動をできるだけ支援しようとしている。

2-3 羽幌町の教育施策

(担当：寺本一平)

(1) 学校数・生徒数・統廃合

	学校名	開校年	閉校年	状況
1	羽幌町立羽幌小学校	1885		
2	羽幌町立羽幌中央小学校	1899	2000	羽幌小に統合
3	羽幌町立平小学校	1899	1965	中央小に統合
4	羽幌町立上羽幌小学校	1906	1971	中央小に統合
5	羽幌町立幌北小学校	1960	2005	羽幌小に統合
6	羽幌町立上築別小学校	1958	1970	幌北小に統合
7	羽幌町立築別小学校	1898	1970	幌北小に統合
8	羽幌町立曙小学校	1906	1990	幌北小に統合
9	羽幌町立光洋小学校	1958	2001	羽幌小に統合
10	羽幌町立似軽巣小学校	1902	1958	光洋小に統合
11	羽幌町立朝日小学校	1906	1992	羽幌小に統合
12	羽幌町立天売小学校	1892		
13	羽幌町立焼尻小学校	1889		
14	羽幌町立太陽小学校	1940	1971	
15	羽幌町立旭丘小学校	1951	1971	

	学校名	開校年	閉校年	状況
1	羽幌町立羽幌中学校	1947		
2	羽幌町立羽幌中央中学校	1950	1975	羽幌中に統合
3	羽幌町立平中学校	1947	1954	中央中に統合
4	羽幌町立築別中学校	1947	1975	羽幌中に統合
5	羽幌町立北辰中学校	1964	1975	羽幌中に統合
6	羽幌町立天売中学校	1947		
7	羽幌町立焼尻中学校	1947		
8	羽幌町立太陽中学校	1947	1971	
9	羽幌町立旭丘中学校	1958	1964	
10	羽幌町立曙中学校	1949	1964	旭丘中に統合
11	羽幌町立上羽幌中学校	1951	1971	

	学校名	開校年	閉校年	状況
1	北海道羽幌高等学校	1950		1951：道立移管
	普通科	1950		
	機械科	1963	1981	
	定時制	1948	1985	
2	北海道天売高等学校 定時制	1954		1955：町立移管（天売村合併）
3	北海道焼尻高等学校 定時制	1953	1979	1959：町立移管（焼尻村合併）
4	北海道羽幌太陽高等学校 定時制	1951	1971	1952：町立

図表 2-3 羽幌町の学校の統廃合過程

羽幌町には 2016 年現在、小学校、中学校がそれぞれ 3 校、高校が 2 校と計 8 つの学校があり、天売島には小学校・中学校・高校が、焼尻島に小学校・中学校がそれぞれ 1 校ずつ置かれている。児童・生徒数は小学校 3 校で 311 人、中学校 3 校で 185 人、高校 2 校で 155 人となっている。

羽幌町の小学校、中学校、高校は統廃合を繰り返して現在の数となった(図表 2-3¹⁵⁾)。例えば、羽幌太陽高等学校は 1951 年に炭鉱採掘で栄えた地区に定時制高校として開校したが、炭鉱の閉山に伴い、1971 年に閉校した。また、羽幌町立羽幌小学校は統合された学校をさらに統合するといったことが繰り返され、合計 10 校を吸収合併している。閉校した校舎については、①残っている校舎、②朽ちてしまっている校舎、③解体した校舎の 3 パターンがある。①②については老朽化が激しいため、羽幌町では旧校舎を解体していく計画を立てている¹⁶⁾。なお、統廃合により通学距離が伸びた子どもに対してはスクールバスを運行することで対処を行っている。

(2) 教育費

町としては、①町だけでなく、日本、世界で活躍する人材の育成、②教える側も含めた教育環境の整備、③学校があることによる地域活性化、の 3 点から、教育の重要性を認識し、教育部門への予算配分を行っている(インタビューB氏発言より)。2015 年度の教育費予算は 7 億 9,469 万 4 千円、歳出予算全体に占める割合は 12.9%であった¹⁷⁾。2016 年度の教育費は 13 億 9,245 万 9 千円、歳出予算全体に占める割合は 19.1%である¹⁸⁾。これは前年度と比べると大幅な増額となっており、同年度の目的別歳出予算の中で最大である。この背景としては、羽幌小学校の改築が行われていることが挙げられている(9 億 4,510 万円)。

(3) 社会教育

羽幌町は社会教育として様々な取り組みを行っており、例えば町内の 60 歳以上の方を対象に生花や刺しゅうなどの学習活動、カラオケなどのクラブ活動を通じた交流を行う「いちい大学」、羽幌町出身の書道家である中野北溟氏から寄贈された作品を展示する「書の北溟記念室」事業、羽幌高校と天売高校を開放して行う「教養講座」の開講などが挙げられる。以下では、羽幌町社会教育を考える上で注目すべきことを 3 つ論じていく。

①中央公民館について

羽幌町の公民館は現在中央公民館 1 つのみになっている。かつては分館があったが、過疎化が進むにつれて利用者が減り、集約されていった経緯がある。教育委員会は、公民館の役割を、①学習機会の提供：「いちい大学」や成人講座など学習の場の提供、②学習活動の支援：町の文化団体・サークルに対しての様々な支援、③学習情報の提供：図書室の充実、④地域づくり：文化芸術発表の場、子どもの活動体験の場、と考えており、これらの役割をより強化するための取り組みを行っていきたいとしている。

¹⁵ 羽幌町教育委員会からの提供資料より筆者が作成した。

¹⁶ 羽幌町ホームページ「公共施設マネジメント | 羽幌町」

(URL : <https://www.town.haboro.lg.jp/gyousei/koukyousisetumanejimento/>)

¹⁷ 羽幌町 (2015)『広報はぼろ 増刊号 (予算説明概要書「元気なはぼろ 2015」)』p.2

¹⁸ 羽幌町 (2016)『広報はぼろ 増刊号 (予算説明概要書「元気なはぼろ 2016」)』p.2

その一つとして、図書事業の充実が挙げられる。司書資格を持つ職員の配置、乳幼児が絵本に親しむきっかけづくりとしての「ブックスタート事業」、年齢に適した絵本を新たに渡す「セカンドブック事業」などを行い、公民館図書室を中心とした読書活動の活性化を図っている。こうした活動は、学習機会、学習情報の提供はもちろん、学習活動の教材的支援、図書を通じた人々の交流といった点で、先ほど挙げた公民館の4つの役割に大きく関係している。さらに、単に本を借りるだけではなく、広いスペースでリラックスして本を読む、また住民の情報交換の場となるものとするために、町教育委員会は現在の公民館の老朽化が進んでいる旧館部分を解体・新施設を建設するという計画の中で、新たに図書「室」を図書「館」にしようと構想を練っている（2032～33年で建設予定）。

これらの他に社会教育主事・公民館主事の配置（予定）や、サークル活動・芸術活動の発表機会の提供など、生涯学習や住民交流の場として様々な支援を行っている。また、いま述べた公民館の一部改築の際には、図書館だけでなく文化道場や小ホールなど、多様な機能を持った複合施設としての建て替えを考えており、社会教育の拠点としての公民館の機能の強化を目指している。

②天売島・焼尻島について

2016年現在、天売島・焼尻島に公民館は存在しないが、羽幌町役場の支所や各学校施設がその役割の一部を担っている。例えば、図書の面では役場支所に本棚を置いて図書の貸し出しを行い、コミュニティ施設という面では天売島には研修センターを設置するなどしている。また、職員の面でも、公民館職員としての役割は島の役場支所の職員が受け持っており、適宜羽幌町の職員が島に行きフォローを行う体制をとっている。他にも、乳幼児などについては町の保健師が、学校図書の追加・整理や天売島の保育施設である「ちびっ子ランド」での読み聞かせ活動などについては町の図書室の職員が島に行き対応している。さらに、住民間交流という点では、島内の学校で子どもたちと交流の場を設ける、学校の運動会や文化祭に地域住民が参加するなどといった形で盛んに行われている。

このように、離島という独特の環境の元でも、行政側の工夫や住民の積極的な活動によって社会教育が成り立っている。しかし、施設設置ではなく、職員の移動によって社会教育の機能をカバーしているのが現状である。

③民間・行政の連携について

羽幌町には様々な地域イベントがあるが、羽幌の地域づくりという点で、羽幌町は民間の力を重視している。例えば、羽幌町内の若者商工青年部は自主的に企画を立ち上げ、いままで行われていなかった盆踊りや、中心市街地を歩行者天国状態にして「力自慢大集合～商工会青年部杯綱引き大会」という綱引き大会を開催している。また調査時には、2017年2月に行われる「ウインターフェスティバル」での新イベントについて、様々な関係団体の代表者が集まる「イベント活性化会議」という場で話し合われてもいた。このように、民間や町民が主体的に羽幌町の活性化のための取り組みを行うという流れを町役場は大切にしており、行政はその取り組みをバックアップする形で、公と民の連携を行っている。

（４）羽幌町の高校教育施策

羽幌町には、北海道立羽幌高等学校と羽幌町立北海道天売高等学校の２つの高校がある。以下では、羽幌町の立場から、これら２つの高校に対する各種施策や期待について論じていく。

①北海道立羽幌高等学校（羽幌高校）

羽幌高校は、現在羽幌町に存在する唯一の道立高校である。ラグビーと卓球を中心に部活が盛んであり、同時に学業にも力を入れており、文武両道の高校としての活躍が期待されている。羽幌高校の存続により、町外への通学や寮生活を行わずにすむため家計への負担減になる他、少なくとも３年間は地元約１５０人の高校生がいることになり、地域活性化につながっている。

しかし、少子化や人口減少に加え、近隣学校との生徒数獲得競争などにより、高校存続に関わる入学者確保の問題にも直面している。そこで、羽幌町は２０１６年度から新たに「羽幌高校生徒への支援」（９４９万円）として、町外から通学する生徒の補助や、１人５万円の入学準備費用補助を含めた支援に取り組み始めた。また、クラブ活動や資格検定の費用補助（４００万円）など、生徒が集中して学業に取り組むための環境づくりを進めている¹⁹。このような施策を進める一方で、町内唯一の道立高校存続のために、羽幌高校をどう魅力化するのか、将来地元に戻って地域に貢献してもらうため、どのように郷土愛を育むかが、さらなる課題となっている。

②羽幌町立北海道天売高等学校（天売高校）

天売高校は道立ではなく町立の夜間定時制高校として、２０１６年７月在籍生徒数５人で活動が行われている。町立の場合、学校の運営を町で行うことになるが、夜間定時制であることで教員給与は北海道から支給される²⁰。道立高校としては「全校生徒数５名では厳しいところがあり、むしろ「町立の方が維持管理していきやすい」のである（インタビューＤ氏発言）。

島の人口数維持に悩まされ、在籍生徒数も少ない状態が続いている天売高校だが、羽幌町としては天売高校を存続していきたい考えを示している。その大きな理由が、高校が地域に与える影響力の高さである。次章で詳しく論じるが、天売高校があることにより、少なくとも３年間は高校生が島にいることになる。彼らは高校生であると同時に島の貴重な労働力となっており、観光案内所や「ちびっこランド」等で勤務している。それに加え、高校があることにより、そこに勤める教職員が家族と一緒に島に住むことになり、人口の維持・増加、地域経済の活性化にも貢献している。また、天売高校は地域交流の場ともなっており、運動会や学校祭は島の一大イベントとして、老若男女問わず多くの島民が参加している。他にも「一部科目履修制」や「学校開放講座」の導入により、島民が高校生と共に学習する場ともなっている。このように、天売高校は様々なプラスの効果を島全体に与えているのである。

こうした点から町は天売高校を維持する考えであり、そのために主に財政的な支援を行っている。２０１６年度について言えば、天売高校の各種施設・設備の補修や整備（１,２１４万円）、生徒の入学準備費用や帰省・下宿費用の補助（１４９万円）、教員住宅の整備（４,７１０万円）に加え、生徒

¹⁹ 羽幌町（２０１６）『広報はぼろ 増刊号（予算説明概要書「元気なはぼろ ２０１６」）』pp.14・15

²⁰ 市町村立学校職員給与負担法第２条にて、市町村立の定時制高校の校長・副校長・教頭・主幹教諭・指導教諭・教諭・助教諭・講師の給料・報酬などは、都道府県の負担とすることが規定されている。

募集事業費（402 万円）も町が出している²¹。道内に限らず、道外にも中学校や個人等に対して宣伝活動を行っており、島の、ひいては羽幌町のアピールにもつながるとして、町も積極的に支援している。今後は寮の設立なども視野に入れつつ、継続的に支援を続けたいとしている²²。

以上、羽幌高校と天売高校の 2 校から、羽幌町の高校教育施策について見てきた。行政は、各学校の自主性を第一として、必要に応じて支援を行うという姿勢をとっている。いずれにも共通することは、高校が地域の維持・発展に重要な役割を担っているということであり、その高校の維持のため、制度的、費用的な面等でサポートをしているということである。

2-4 小括

（担当：大沼春子）

少子高齢化、若者の都市部への流出、地域経済の縮小など、羽幌町の抱える問題は、北海道のほかの地方自治体にも共通する点であるといえる。その一方で、陸続きの自治体とはかなり異なる特殊な課題を抱える離島地域をも含む点や、近隣自治体との地理的配置条件²³などが羽幌町特有の課題を生み出している。特に、離島地域は町とは異なる課題やニーズが存在しており、町と島の対話が十分に行われていく必要があると言える。

このような課題を踏まえ、羽幌町としては、今後を長期的に展望した上で、行政・住民・民間の役割と責任の分担を明確にし、行政のみに頼らないまちづくりを目指している。そのため、住民の活動を尊重し、行政はその条件整備や補助を行っていく、という考えに基づいた施策を展開していこうとしている。住民の手によるまちづくりは進められており、例えば、天売島の一般社団法人おらが島活性化会議は、自分たちの地域のために自分たちで動き出す、というスタンスで精力的に活動している。また、羽幌町においても若者商工青年部が主催して盆踊りや綱引き大会が毎年開催されている。町が「イベント活性化会議」を設け、そこで町の冬のイベントについて町民や各関係団体代表者などに話し合ってもらおうという取り組みも、行政主導ではなく、住民主体のまちづくりという考え方に基づいたものと言える。学校教育政策においても、各学校の自主的な取り組みを尊重して町が支援するという構図が基本的である。そのため、このような活動と町からの支援をいかに結び付け、どのように運営していくかということが、今後の課題になっていくと言える。行政と住民、島と町の住民間での意見・課題の共有や意見交流という課題は今後も存在するが、地域住民が自分たちの手でまちづくりを進め、行政がそれを支援する、民間や住民の手では補いきれない部分を行政が担っていくというような、住民の手によるまちづくりという考えが根つき、町と住民のパートナーシップがうまく機能するところに、自立と自主のまちづくりが実現していくと考えられる。

町の持続的な発展にとって、若者の存在は不可欠な要素である。道内でも高校の適正配置が進む中、羽幌町には 2 つの高校が存在するが、町としては積極的にこれらの高校を残していく方針である。高校があることで一定数の若者が町にとどまることにつながる。逆に、高校が地元にな

²¹ 羽幌町（2016）『広報はぼろ 増刊号（予算説明概要書「元気なはぼろ 2016」）』p.14

²² 2018 年度に向けて、学生寮の設置を町議会に提案する動きがある（「北海道新聞」2017 年 6 月 15 日朝刊）。

²³ 一般的に、本州に比べて北海道は自治体間の距離が遠いため、合併や連携の支障となりやすい。それに加え、羽幌町は近隣町村と縦並びとなっていることから、より合併や連携が地理的に制約されるという課題を抱えている。

くなった場合、中学校を卒業した生徒は進学のためには自宅を出て下宿するか、交通費と時間をかけて近隣自治体の高校に通うかのどちらかを選ばなければいけない。特に、天売島の生徒の場合は、必然的に島を出て下宿することになる。高校があるからこそ若者が地元にとどまることが可能になるのである。たとえ高校卒業後に進学や就職で地元を離れることになっても、高校の3年間で地元で育てられることの意義は大きい。高校があることで町に高校生がとどまるということと同時に、家計の負担や地域の人材育成という観点から見ても、地元で高校まで子どもを教育できることは大きな意義があるといえる。特に、天売島においては、高校が地域において重要な役割を果たしている。高校があることで生徒と教員が島に居住し、地域の活力となるとともに、人口約300人の島にとっては20名弱の高校関係者は大きな経済効果と労働力を生み出す。それだけではなく、天売高校は地域の教育と文化の担い手として重要な役割を果たしている。天売高校と天売島のあり方は密接につながっており、町立であっても町として残していこうとされているのは、天売高校がこのような役割を担っているからと言える。

第3章 北海道天売高等学校の教育実践

本章ではまず、天売島の概要（1節）と天売高校の概要（2節）を示し、天売高校の特色ある教育と取り組みを概観する（3節）。これらを通して、最後に、過疎地域における小規模高校の可能性について検討していく（4節）。ここでの記述は、北海道天売高等学校へのインタビューや提供資料の他、ホームページや新聞記事・関連文献を用いて行っている。

3-1 天売島の概要

（担当：平子裕）

天売島は、北海道留萌振興局管内の苫前郡羽幌町にある羽幌港の西約30kmの日本海に浮かぶ島である。島の東側に並んで浮かぶ焼尻島とともに、国定公園（暑寒別天売焼尻国定公園）に指定されている。総人口は317人（2017年3月末）であり、1947年度に行われた国勢調査以降、増加した年もあるが、総人口は減少の傾向にある。

明治時代以降、入植者による乱伐、山火事の発生により島内の森林の大半を焼失する状態にあった。生活に必要な水資源に事欠くような状況となったため、第二次世界大戦後、北海道が治山事業により植林が開始された。自然環境を特徴づける事例として、島の北西海岸の断崖には、ウミガラス（オロロン鳥）・ウトウ・ケイマフリ・ウミウ・オオセグロカモメなどの海鳥の繁殖が確認されている。そのため、1938年8月8日に「天売島海鳥繁殖地」として国の天然記念物に指定され、1982年3月31日には、国指定天売島鳥獣保護区（手段繁殖地）に指定されている。羽幌町では、海鳥などの野生生物の保護を目的に、2012年4月に天売島ネコ飼養条例が施行され、ネコの増加抑制策を進めている。

主産業は水産業をはじめとした第一次産業と、観光・旅行業などのサービス業の第三次産業である。タコ・ウニ・ナマコ・養殖ホタテ貝が主要魚種であり、特にウニやナマコは、天売高校で行われている水産実習と連携を取りながら、島外へのPRを進めている。しかし、漁業では後継者不足が深刻化しており、高校卒業後に島外へ出てしまう子どものUターン、さらには、漁業に

興味を持ってもらい、島外出身者の I ターンを増やす活動も進められている。

公共施設について、教育施設は天売小中学校と天売高校がある。町営住宅も整備されているが、空き住宅が非常に少なく、島外からの移住者の住宅確保は厳しい状況にある。医療機関は、道立の診療所が 1 か所あり、急患が発生した場合はドクターヘリや北海道防災ヘリ等で本土の病院の利用が可能となっている。

冬はフェリーが 1 日 1 便となり、本土も半分以上が通行止めになるため、一年の中でも特に厳しい季節である。主産業が漁業であることと、夏の観光業が盛んであることなどにより、繁忙期を超えた後の冬の魅力をどう伝えていくかが、今後の大きな課題の 1 つとなっている。

3-2 北海道天売高等学校の概要

(担当：高嶋真之)

(1) 現在の天売高校の概要

天売高校は、羽幌町天売島に設置されている、町立夜間定時制課程普通科の高等学校である。現在は、「社会や地域の期待に応え、郷土に誇りを持ち、将来を担う人を育む」という学校教育目標の下、生徒・教職員・地域住民が一体となった特色ある様々な教育活動が展開されている。ここでは、その前提となる学校の現在の概要を、①生徒、②教職員、③教育の特徴の 3 つに分けて論じていく。

①生徒

2016 年 7 月現在、天売高校には 1 年生 3 名、3 年生 2 名の計 5 名の生徒が在籍している。天売高校に入学する生徒のほぼ全員が島内出身者であるが、後に述べるように、2015 年度から実施されている島外からの生徒募集の取り組みにより、島外出身者も入学し始めている。

夜間定時制である天売高校の生徒は、昼はそれぞれの持ち場で働き、夜に学校で学ぶことがほとんどである。そのため、目的意識や意志が強く、しっかりとした生徒が多い。逆に言えば、「そういった生徒でなければ続かない」（インタビュー上田校長発言）ようである。そのため、近年は高校を中退する生徒はほとんど見られない。また、卒業後の進路については、過去には漁業後継者として家業を継ぎ、島に残る生徒も多くいた。けれども近年は、島に就職先がほとんどないことに加え、あったとしてもそれは天売高校の生徒のために確保されている職場であることから、島に残り続けることは難しく、一度は島から出ざるを得ない状況になっている。この他、幼少期から異学年交流が盛んに行われているため、優しく思いやりがあり、面倒見が非常によい生徒が多いことも特徴の 1 つである。

②教職員

同じく 2016 年 7 月現在、天売高校は、校長・教頭を含めた 9 名の教員と事務生・公務補が 1 名ずつの計 11 名の教職員から構成されている。昔から若手教員の初任地になることが多く、現在もそれが続いている。そのため、教員の平均年齢は 37.5 歳と非常に若い。昨年度離任された教員で在籍年数が 7 年という方がいたが、比較的短い期間の内に教員が総入れ替えとなってしまう。また、小規模校であるため教員配置が極めて難しく、例えば、天売高校には常駐の養護教諭はおらず、公民・水産については臨時免許状を授与することにより教科を設置している。

③教育の特徴

天売高校の教育の特徴は、大きく 3 つのことが挙げられる²⁴。

まずは、「一人ひとりを大切にする少人数教育の実現」である。天売高校では、小規模校であることを活かして、生徒一人ひとりにきめ細やかな指導を行っている。どんなに小さな高校であれ、「高校」である以上は高校レベルの学力を生徒に保障していくということを、教員間でも共有している。そして、それは授業中のみならず、夏季・冬季講習や進学講習、あるいは資格検定試験に向けた講習といった様々な形で展開されている。

次に、「進路実現に向けたコース別就学スタイル」である。天売高校では、「生徒の多様なニーズに応える教育課程を編成し、学習指導を充実させる」ことを基本方針として、2005 年から、「4 修コース（1 日 4 時限）」「3 修一般コース（1 日 5 時限）」「3 修進学コース（1 日 6 時限）」から成る「3 コース制」を導入している（図表 3-1）²⁵。これにより、夜間定時制でありながら、通常は 4 年のところを 3 年で卒業することが可能となっている。また、必要に応じて、昼に働く時間や進学・就職に向けた準備の時間など柔軟な時間設計が可能となっている。

コース	特 徴
4 修 コース	・従来の夜間定時制の学習形態をとり、4 年で卒業する。 ・就労しやすい環境を整えることができる。
3 修 一般コース	・従来の夜間定時制の学習形態+1 時限の授業を加えて 3 年で卒業する。 ・さらに、就職や、専門学校・短大・高等看護学校・4 年制大学などへの進学を目指す。
3 修 進学コース	・従来の夜間定時制の学習形態+2 時限の授業を加えて 3 年で卒業する。 ・さらに、国公立大学などへの進学を目指す。

図表 3-1 天売高校「3 コース制」の概要

最後は、地域に根差した特色ある授業である。天売高校では、天売島の基幹産業である漁業を活かし、開校して間もなく普通科でありながら水産の授業を行っている。また、2014 年度からは、土曜授業として郷土学習「天売学」を実施している。これらの詳細は次節（3-3「羽幌町立北海道天売高等学校の特色ある教育と取り組み」）にて論じるが、このように地元密着型の科目を設けることで、生徒自身が天売島についてより深く知り、天売島への愛着心を育むことにつながっている。

（2）天売高校の沿革

次に、天売高校のこれまでの歴史を簡単に確認する（図表 3-2）。天売高校は 1954 年に設置の許可を受け、「天売村立北海道天売高等学校」として同天売中学校に併置され、翌年（1955 年）、羽幌町と天売島の合併により、「羽幌町立北海道天売高等学校」として初めての入学を受け入れた。当時、北海道の高校が町村立から道立へと移管する中であって、天売高校は現在まで一貫し

²⁴ 天売高校 HP「教育の特色 of 天売高等学校」（URL：<http://www.teuri.ed.jp/kyouiku/edu.html>）

²⁵ なお、コース制導入以降、現在在籍中の生徒を含む全生徒が「3 修一般コース」を選択している。

て町立高校として存続していることに大きな特徴がある。近年の新たな動向として、3 年修業制度の導入（2002 年）とこれを踏まえた「3 コース制」の導入（2005 年）、一部科目履修制度の導入（2005 年）や土曜授業の導入（2014 年）による地域の生涯学習センターとしての機能や郷土学習の強化が挙げられる。

年	月	日	出来事
1954	9	1	北海道天売高等学校設置の許可を受ける。
	10	1	北海道天売高等学校校長として、羽幌高等学校長・岩倉友八兼任。天売中学校に併置。
1955	4	1	羽幌町・天売村の合併により、羽幌町立北海道天売高等学校となる。校章制定。
1956	7	1	北海道天売高等学校 PTA（父母と先生の会）発足〔初代会長・浜田佐太郎〕。
1960	12	1	水産実習室（燻製室）完成。
1961	9	1	北海道天売高等学校教育振興会発足〔初代会長・木下時三郎〕。
1962	12	3	校歌制定〔江口孝作詞、林喬木作曲〕。
1963	3	8	独立校舎落成・移転終了。
	6	1	水産実習室（調理室）完成・燻製室移転完了。
1964	11	22	開校 10 周年記念式典挙行。
1968	9	1	校舎増築（3 教室完工）。
1971	12	12	北海道天売高等学校水産実習室兼天売共同作業所落成。
1974	11	1	屋内体育館完成。
	11	22	開校 20 周年・屋内体育館記念式典挙行。
1976	3	24	留萌管内教育実践表彰受賞。
1984	8	26	創立 30 周年記念式典挙行。
1987	2	25	北海道教育実践研究論文優秀賞並びに留萌管内教育実践表彰受賞。
1988	10	28	北海道高等学校水産クラブ研究発表大会参加開始。
1991	2	26	留萌管内教育実践研究論文優秀賞受賞。
1994	9	4	創立 40 周年記念式典挙行。
1998	2	20	北海道教育実践研究論文優秀賞並びに留萌管内教育実践表彰受賞。
	3	6	羽幌町優良青少年顕彰受賞（天売高校水産クラブ）
1999	4	20	北海道野生生物基金より助成（ウミガラスの減少要因についての調査）。
2000	1	12	インターネット導入。
2002	4	1	留萌管内教育課程実践成果論文優秀賞受賞。3 年修業制度導入。
2004	8	28	創立 50 周年記念式典挙行。
2005	4	1	3 コース制導入。一部科目履修制導入。二学期制に移行。
2006	11	9	北海道高等学校水産クラブ研究発表大会にて優良賞受賞。
2007	11	8	北海道高等学校水産クラブ研究発表大会にて優良賞受賞。
2012	11	7	北海道高等学校水産クラブ研究発表大会にて優良賞受賞

2014	4	1	土曜授業の導入。
	8	5	全国高等学校定時通信制体育大会第 47 回卓球大会女子個人の部出場。3 回戦進出。
	9	27	創立 60 周年記念式典挙行。
	11	11	北海道高等学校水産クラブ研究発表大会にて優良賞受賞
2015	10	29	北海道高等学校水産クラブ研究発表大会にて優良賞受賞
2016	2	22	留萌管内教育実践表彰受賞。

図表 3-2 天売高校の沿革

ここで、現在までの天売高校の入学者数・在籍者数の変遷についても確認しておく（図表 3-3⁽²⁶⁾）。



²⁶ 天売高校からの提供資料より筆者が作成した。

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代
入学者数平均	10.2	13.0	10.8	6.3	3.9	2.3	1.7
在籍者数平均	36.0	49.9	44.1	28.5	16.6	8.6	5.1

図表 3-3 天売高校の入学者数・在籍者数の変遷

天売高校への入学者数は、多少の乱高下があるものの、1970年代までは10名以上の年も多く見られていたが、1981年を最後に一桁になり、1990年代後半以降は5名以下の状態がずっと続いてしまっている。この点は10年ごとに区切って算出した入学者数平均からも明らかである。また、天売高校の在籍者数は、1967年の66名を頂点として、入学者数の減少とともに下降の途を辿っている。先にも述べたように、2002年から3年修業制度が導入され、生徒が3年で卒業できるようになったことにより、2004年からは入学者数だけではなく在籍者数も一桁となってしまった。そして、2010年代の現在は、入学者数平均1.7名、在籍者数平均5.1名となりながらも、辛うじて高校が存続している状態である。

(3) 島外からの生徒募集の開始

このような歴史的経過の下、2000年代に入り新たな取り組みが行われている一方で、入学者数・在籍者数ともに一桁となってしまうのが、今日の天売高校の姿である。そこで現在、天売高校にとって最大の課題となっていることが、入学者の確保である。

図表 3-3 から明らかなように、入学者数が危機的状況になったのは今に始まったことではない。しかし、2010年代に入り、入学者数0名の欠学年が2回（2011年・2015年）発生したことで、天売高校だけではなく羽幌町としても危機意識が高まっていった。そのため羽幌町は、2015年に「天売高等学校生徒募集事業」として402万円（内、国費170万円）の予算を充て、天売高校の生徒募集を支援するための事業を立ち上げた。これを受けて天売高校は、2015年に「生徒募集推進協議会」⁽²⁷⁾を立ち上げ、北海道だけではなく本州も対象とした島外からの生徒募集を本格的に実施し始めた⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾。その成果もあり、2016年度の入学者3名の内の2名が島外出身者（札幌市1名、東京都1名）となっている。そして、2016年には、同事業として485万円の予算を充てるだけではなく、地方創生加速化交付金を活用して、新たに「町立天売高等学校活性化事業（生徒募集）」として1,606万円を充て、地域おこし協力隊の隊員を天売地区に新たに2名配置し、生徒募集を強化している⁽³⁰⁾。

生徒募集事業の具体的な取り組みは、大きく分けて2つ挙げられる。

1 つ目は、中学校への訪問である。これは羽幌町教育委員会が主導しており、留萌管内及び札

²⁷ 天売高校、羽幌町教育委員会、同校同窓生、同校振興会、PTA、天売島の有志（例えば、天売島地域おこし協力隊など）から構成されており、生徒募集や受け入れ態勢の整備を行っている。

²⁸ 羽幌町（2015）『広報はばろ 増刊号（予算説明概要書「元気なはばろ 2015」）』p.14

²⁹ 島外からの生徒募集の対象が本州にまで拡大した背景として、上田校長は「道内だけでは限りがありますし、この留萌管内はどこの高校も生徒募集は共通の悩みですから。そういうところから果たして天売高校に来てくれる生徒がいるかというの難しいと思うんですね。そして、北海道の中でも、札幌なんか回ってはいますけれども、地域に呼んでくる学校というのはうちだけではありませんから、そういう学校と競合する形になったときに「道外から」という形になったと思うんですね」と述べている。

³⁰ 羽幌町（2016）『広報はばろ 増刊号（予算説明概要書「元気なはばろ 2016」）』p.14,p.32

幌市や旭川市などの都市部の中学校を対象として学校の概要について説明を行っている。初年度の 2015 年は、「天売に高校があるんですか？」という反応が多かったようであるが、新聞やテレビで取り上げられたこともあり、2 年目の 2016 年は天売高校の存在もある程度浸透し、認知度の高まりも感じられているようである（インタビュー上田校長発言より）。

2 つ目は、「天売高校オープンスクール」の実施である。オープンスクールは毎年 7 月に行われ、学校説明会や水産実習体験で学校の様子を、島一周や海鳥観察で島の様子を知ってもらい二本柱となっている。2015 年には 4 名（島内生徒 2 名、島外生徒 2 名）が、2016 年にも 4 名（島内生徒 1 名、島外生徒 3 名）が参加している。オープンスクールは、島外の生徒にとって天売島・天売高校を知る数少ない機会である。学校生活については、中学校でのそれと全く異なる。例えば、昼は働き、夜に授業を受けること、親元を離れた生活をしなければならないことなどが挙げられる。また、生活の不便さやプライバシーのなさなど、天売島という約 300 人足らずのコミュニティで生活するという意味は、実際に島を訪れないとわからないことが多い。そのため、オープンスクールでは「飾ることなく現実を知ってもらう」（インタビュー上田校長発言）ことが最も重要と考えられている。

3-3 北海道天売高等学校の特色ある教育と取り組み

（担当：木村裕・森田未希³¹）

（1）北海道天売高等学校の教育課程

①授業実践について

天売高校では、「目の前にいる子どもに対して先生方がしっかり関わっていくことが、うちの学校の売りというか、大前提と思っています」という上田校長の言葉に表れているとおり、少人数を活かした実践が行なわれている。

国語・数学・英語の主要 3 科目は、それぞれ学年ごとに授業が行われる。生徒 2～3 人に対して教師が 1 人つくというのは、大変手厚いと言える。選択科目の関係で、先生と生徒が一对一の授業となることもある。少人数授業のため、生徒は分からない点を言い出しやすい。それぞれの生徒によって理解度は異なるため、全ての生徒に理解を促すためには教師の授業の工夫が求められる。同時に、少人数教育であることは、生徒一人ひとりのことを深く知ったうえで指導が行えることを意味する。進学を希望する生徒の場合は、学校が始まる前に補習を行うことができる。生徒の希望に応じて、昼間の仕事を辞めて、補習の時間に充てることもある。

月に 1 度の ALT による授業と、体育の授業は全校生徒 5 人合同で行われている。体育の時間は、生徒だけではなく先生も授業に参加する。総合学習の時間も、全員で授業を受けることが多い。学年の壁を超えて合同で授業を受けることは、異年齢交流となる。一般的な高校では、学校内における異年齢交流の機会といえば部活動程度であり、同じ空間で共に授業を受けることはほとんどない。このことから、天売高校での教育実践は特徴的だと言える。

上田校長が語っているように、天売高校は若手の教師の初任地となることが多いことから、生徒との距離が近い天売高校に赴任したことは、教師としてのその後の成長に大きく影響を及ぼすのではないだろうか。天売高校の若い教師は、一人で一教科を担当するため授業の仕方など、不

³¹ 本節は主に森田が執筆しており、「（2）①天高祭」を木村が執筆している。

安は多いだろう。教師としての仕事以外にも、離島であることから発生する生活面での不便さなど、天売島での厳しい環境のもとでの経験を、次の赴任校でも活かしてほしいというのが、上田校長の思いである。

②水産実習・課題研究

天売高校では、天売島の基幹産業が水産業であることから、地域の特性を生かし、普通科でありながらも水産の科目を設置している。水産実習の目的として、以下の2点が挙げられる。1点目は、地域の産業を体験的に学習する機会を設け、水産資源の有効活用とその加工技術の習得を図りながら、身の回りの環境について考えること、2点目は、自らテーマを設定し、課題研究に取り組むことで、問題解決能力を育てるとともに、科学的視点から地域の基幹産業である水産への理解を深めることである。教室で机について授業を聞くだけではなく、自ら考え、行動を起こすこと、さらには地域を深く知ることにつながる。水産実習では、主に地元で水揚げされた材料を用いて、下処理からパック詰め、製缶など製品として完成するまでの工程を行う。5月にカレイ燻製、6月にタコ燻製、7月にウニ缶詰め、10月にスモークサーモン、11月にサケ缶又はサケチップ（隔年開講）の、年間5種類からなる水産実習を実施している。

天売高校では、水産実習だけではなく、地域の自然や水産業をテーマにした「課題研究」にも、毎年意欲的に取り組んでいる。その成果は、北海道高等学校水産クラブ研究大会にて毎年発表している。過去15年分の研究テーマは以下の通りである（図表3-4）³²。

2002（平成14）年度	海岸漂着物から見る海洋環境汚染について
2003（平成15）年度	海岸クリーンアップ大作戦
2004（平成16）年度	THE 塩～in the Teuri island～
2005（平成17）年度	漁具の再使用～補修技術の継承を目指して～
2006（平成18）年度	自然豊かな天売島を目指して～生活排水浄化の試み～
2007（平成19）年度	自然豊かな天売島を目指して～貝殻を用いた生活排水浄化の研究～
2008（平成20）年度	自然豊かな天売島を目指して～ヒルカイを用いた生活排水・海水の浄化研究～
2009（平成21）年度	天売島の水産廃棄物リサイクルを目指して～ウニ殻・ホタテ貝殻の活用実験～
2010（平成22）年度	RECOVERY TEURI～水産廃棄物再利用と藻場再生～
2011（平成23）年度	藻場再生プロジェクト
2012（平成24）年度	ナマコハンドクリーム ＊優良賞受賞
2013（平成25）年度	タラシュウマイ
2014（平成26）年度	マリンバイオプラスチック ＊優良賞受賞
2015（平成27）年度	マリンバイオプラスチックⅡ ＊優良賞受賞
2016（平成28）年度	つくろう！天売の名産品 ＊努力賞

図表 3-4 北海道高等学校水産クラブ研究大会における天売高校の研究テーマ

³² 天売高校 HP「水産クラブ研究発表 of 北海道天売高等学校」
（URL：http://www.teuri.ed.jp/gyouji/club.html）

ここでは、2012 年の研究テーマ「ナマコハンドクリーム」を、水産実習の例として挙げる。

ナマコは、天売島の特産品である。しかし、収穫したとしても、傷ついたナマコは商品にならない。そのため、傷ついたナマコの一部は出荷せずに海に戻っていた。当時、天売高校に通いながらナマコ漁師をしていた 3 年生の生徒は、収穫したが出荷できない傷物ナマコをもったいないと感じていた。ナマコはコラーゲンが豊富で、殺菌効果があるとされる成分も含み、皮膚炎や皮膚過敏症を防ぐ効果があるとされ、化粧品でも使用されている。このことを知り、「減少する観光客を増加させたい」、「島の漁師の手荒れを軽減できないか」という思いから、ナマコを原料とした「ご島地コスメ」のハンドクリームの研究が始まった。2012 年 7 月、生徒たちは地元漁師の協力の元、傷物ナマコ 700 グラムを譲り受けた。試行錯誤を繰り返し、同年 9 月には 250 グラムの試作品が完成した。保湿効果の検証実験は、北海道大学農学部が協力した。

ナマコハンドクリームは、北海道高等学校水産クラブ研究大会にて優良賞を受賞し、新聞をはじめ各種メディアに取り上げられた。高校の実践がメディアに取り上げられることで、天売島の知名度も上がり、天売島・天売高校の PR にもつながった。その翌年には、(株)ワンダードックから天売産のナマコエキスを配合したペット用の肉球クリームである「NAMARA!オーガニックシアバタークリーム」が販売されている³³。天売高校の生徒が作成したナマコハンドクリームの製造工程書を元に商品化された。(株)ワンダードッグのオーナーが、天売高校のナマコハンドクリームが 2012 年度の「北海道高等学校水産クラブ研究大会」で優良賞に輝いたというニュース記事を見て、天売高校の校長に商品化の許可をもらったことが経緯である。

水産実習・課題研究の意義・成果として以下の 2 点が挙げられる。1 点目として、食品の生産・流通・消費の流れを目の当たりにできることである。漁師がどのような仕事をしており、地域の特産品でもある海産物がどのように収穫・加工されているのか、そして、どのように消費者の手元に届くのかを学ぶことで、食への感謝と自然豊かな天売島への理解を深めることができる。2 点目として、高校における教育活動の中で、実際に商品が生まれているということである。推測の域を出ないが、その成果として「高校生の自分たちでも、僻地にある小さな高校でも、社会に認められるものを作ることができる」という自信を持てるのではないだろうか。同時に、天売高校はそのような経験ができる高校であるという魅力の高まりが期待される。

③天売学

永田教頭は「(天売島に観光客が：引用者註) 何しに来るんだろうって生徒たちは知らないんです。なんで、こんなところにきて何が面白いんだろう(と生徒たちは思っている：引用者註)」と、インタビュー時に語っている。教員間では、天売高校の生徒たちは天売島の自然環境や文化、地域産業に対する知識が不十分である、という認識があった。

そこで、「郷土を知り、郷土を愛する心の育成」をスローガンに、2014 年から土曜授業として「天売学」がスタートした³⁴。天売高校は、道内の定時制高校で唯一、土曜授業を行っている高

³³ 「オーナー日記：オーガニックシアバタークリーム発売 - livedoor Blog」
(URL : http://blog.livedoor.jp/wonder_owner/archives/2150480.html)

³⁴ それ以前は、総合的な学習の時間で郷土芸能の体験や太鼓を取り入れていた。

校である。土曜授業のため、授業時数が確保でき、主要教科への影響は少ない³⁵。また、平日ではなく土曜日に行くからこそ、地域の人を講師に呼びやすく、同時に地域の人の参加を期待することができる³⁶。天売学では、天売島の歴史・文化・産業・自然について3年を1サイクルに学び、年度末には生徒たちが天売学を通して学んだことを、島民に向けて発表する（図表3-5）。

天売学の意義・成果として以下の3点が挙げられる。1点目として、天売島の歴史・文化・産業・自然などを学ぶことで、自分たちが生まれ育った郷土を知り、郷土愛の育成につながる。2点目として、天売学を通して、生徒たちは課題の解決や探究活動に主体的・創造的・協同的に取り組む力を身に付けていく。3点目として、地域に根差した、天売高校でしかできない学びとなる。天売学の講師には、天売高校の卒業生も含まれる³⁷。天売高校の生徒は、卒業生が講師として天売学に参加している姿を見ることで、天売高校と地域の結びつきを意識する。島外から天売高校に進学する生徒たちや新しく赴任してきた教員は、これらの郷土学習为天売島を知る機会となる。地域の人たちは、天売高校がどのような教育を行い、どのように生徒が学んでいるのかを、実際に参加して目にするすることで、天売高校の生徒たちの将来を応援するようになる。

日付	単元	講師	学習目標	学習内容
4/23	観光Ⅰ (実習)	教員	観光地の保全活動を通じ、観光の在り方について考察する	赤岩展望台清掃、 島内一周清掃
5/10	自然Ⅰ (座学)	地域 民間講師	天売に飛来する渡り鳥を観察・調査し、保護の在り方を考察する	野鳥の種類、飛来ルート なぜ天売に来るのか
5/14	自然Ⅱ (実習)	地域 民間講師	天売に飛来する渡り鳥を観察・調査し、保護の在り方を考察する	野鳥の種類、飛来ルート なぜ天売に来るのか
6/11	観光Ⅱ (実習)	地域 民間講師	天売観光の現状の理解・離島における観光の在り方を考察する	観光船での自然観察を通じて、天売島の自然を生かした観光について考察する
6/25	産業Ⅰ (実習)	教員	実習を通じ、水産物の高度利用や加工の必要性を認識する	水産実習体験（ウニ缶）
8/20	伝統文化 (実習)	地域 民間講師	天売太鼓を通じて、伝統文化の創造と継承を図る	天売太鼓の工夫と練習
9/24	自然Ⅲ (座学)	外部講師 大学教授	天売の自然を学習・島を取り巻く環境について理解を深める	天売の森と海の関係について学ぶ
10/15	産業Ⅱ (実習)	教員	実習を通じ、水産物の高度利用や加工の必要性を認識する	水産実習体験（スモークサーモン）
10/22	観光Ⅲ (座学)	地域 民間講師	天売観光の現状を理解・離島における観光の在り方を考察する	天売の観光資源、観光客の推移等

³⁵ ただし、教員は土曜日にも出勤することになるが、長期休業期間に休みを振り替えることで補っている。

³⁶ フィールドワークや実習型の天売学は地域の人に開講されていないが、座学は開講されている。観光船に乗って天売島を一周する、等の料金が発生する回は開講されない。

³⁷ 天売高校 HP「ウニ町 diary ページ 7」（URL：<http://www.teuri.ed.jp/gaiyou/unimachi/unimachi07.html>）

10/22	産業Ⅲ (座学)	地域 民間講師	天売の基幹産業である水産業について学習・現状を理解する	ウニ漁師・刺し網漁の一年 準備・漁獲・出荷、 漁獲海域、漁具
10/29	自然Ⅳ (座学)	地域 民間講師	天売の自然について学習・島の環境保護について理解を深める	島の環境保護、 猫やねずみの駆除
12/17	未来Ⅰ (実習)	教員	天売学で学んだ事柄から、今後の天売発展について考察する	3年間の天売学をまとめ、発表原稿を作成する
1/28	未来Ⅱ (実習)	教員	これまでの学習をまとめ、発表する	3年間の天売学のまとめをパワーポイント等で発表する

図表 3-5 天売高校「天売学」の実施計画（2016年度）

併せて、天売小中学校では、小学校の生活科と総合的な学習の時間で、「大好き天売を伝えよう」のテーマで、毎年天売島を紹介するパンフレットを作成している³⁸。調べ学習や見学学習を通して学んだことを、生徒一人ひとりが手書きでまとめる。それらは、年度ごとにひとつの冊子にまとめられ、観光客・島民が手に取って見ることができるように、フェリーターミナルや郵便局など島のあちこちに置かれる。

小学校から高校までの一貫した郷土学習は、最初は観光客が何を目当てに天売島に来るのか分からなかった児童生徒に天売島のPRポイントを実感させ、郷土愛を育むことにつながる。

④働きながら学ぶ生徒たち

夜間定時制である天売高校では、多くの生徒が昼間は働き、夜間は学校で学ぶという生活を送っている。2016年度の生徒就業率は100%である³⁹。生徒たちは、自己の将来に備え働くことと、学校での学びの両立に励んでいる。芳垣文子（2014）⁴⁰や新入生用学校案内では、保育施設・フェリーターミナル・郵便局・観光案内所・漁業の手伝い・天売小中学校の公務補と、それぞれの職場で働く生徒たちの姿が描かれている。漁業と観光が中心産業で働き口が少ないなか、島の大人たちは、地域と学校が一体となって、高校生が働く場を確保し続けてきた。現在は、家業を手伝う場合と、勤め先を学校・地域に用意してもらう場合の2種類がある。後者の場合は、卒業のタイミングでその職場は後輩に受け継ぐため、高校卒業後も仕事を継続することは難しいことから、島外へと出ていかざるを得ない。

ある生徒は、小さい頃に通っていた島の保育施設「ちびっこらんど」で働いており、「高校生でありながら、子どもたちの日々の成長に関わることができるやりがいのある仕事」と語っている⁴¹。そして、高校生の間に働いて蓄えたお金は、高校卒業後の進路に役立てようと考えているようである。天売高校は仕事・学校行事を通して地域の人と関わる機会が多い。そのため、同年代

³⁸ 北海道教育委員会ホームページ「羽幌町立天売小学校 | 教育庁総務政策局教育政策課」

(URL: <http://www.dokyo.i.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksk/kouhou/superint/teurisho.htm>)

³⁹ しかし、必ず働かなければならないわけではない。あくまでも生徒自身の希望が優先されており、例えば、進学を目指す生徒で勉強時間が足りないと感じる場合は、学校が始まるまでの時間を補習の時間に充てている。

⁴⁰ 芳垣文子（2014）『小さな離島のマンモス夢学級 人口348人・天売高校の生徒たち』WEB新書

⁴¹ 『平成29年度新入生用学校案内』（URL: http://www.teuri.ed.jp/_userdata/2016-9gakko_annai.pdf）

以外との人間関係の中で学ぶことが多いと語っている。仕事と学校の両立は慣れるまでは大変だが、高校生のうちに、礼儀や敬語を身につけることができると語る卒業生もいる。

天売島に唯一存在する保育施設である「ちびっこらんど」は、保育士不足の悩みを抱えていた。ホームページ等を活用して保育士を全国募集しても、保育士不足の悩みは解消されなかった。そのような状況の中で、この保育施設で働いている天売高校の生徒がいる。つまり、高校生は貴重な労働力であり、地域のひとたちからの期待を背負って、地域の人たちから望まれて働いていることが分かる。

このように、働きながら学ぶ天売高校では、一般的な高校で学ぶことだけではなく、天売高校でしかできない学びも多い。それらの学びの中にも、地域との関わりが密接に見て取れる。

（２）密接に関係する高校と地域社会

①天高祭

「天高祭」は、天売高校の学校祭の通称である。2016 年度のテーマは「Pleasant×Present」で、このテーマの下で 5 人の生徒が一人何役もこなしながら行われる。生徒は昼間の時間に働いているため、全日制の高校とは異なって、夕方から天高祭が始まる。1 日目は屋台・授業成果の展示発表・射的などの催し物が行われる。これらは生徒と地域が直接関わるきっかけとなり、地域の協力も必要なプログラムとなっている。2 日目は体育館で「天売ステーション」「島民のど自慢」「芸達者さんいらっしやい」などの様々な企画が行われ、楽器演奏・のど自慢・一芸披露・ステージ発表が実施されている。

天高祭において最も重要なことは島全体を巻き込んだ行事となっていることである。プログラムには、生徒や教職員だけではなく地域住民も参加することになっており、様々な出番が用意されている。地域住民の中でも小中学校の教員の協力は大きく、それぞれの芸や持ち歌で会場を盛り上げることで、地域住民の仲間入りにつながっている。天売小中学校は公立学校のため、教員は定期的に異動となってしまう。このような短い期間であっても、地域住民が教員を「島民」として歓迎するきっかけになり得るのである。

天高祭の企画・運営・実施を通して、生徒は地域の中で過ごしたり働いたりしている普段の姿とは異なる一面を見せることになる。そしてこれは、途中で生徒が「普段お世話になっている地域の方々への感謝の気持ちを込めて」と話しているように、常日頃から天売高校をサポートしてくれている地域の人々に、生徒から感謝を伝える場としての意味ももっている。

②高校と地域行事のつながり

天高祭だけではなく、「地域の大切な行事の時は島民総出で参加」することが、天売島との特徴として挙げられる⁴²。天売高校の生徒・教職員はもちろん、漁業関係者も終日休業となり、行事に参加する。

地域の行事の 1 つに、島民大運動会がある。もともとは、「島民運動会」と「保・小・中・高合同運動会」の 2 つがそれぞれ実施されていたが、児童生徒数の減少や天売島の過疎化といった理

⁴² 天売高校 HP「ウニ町 diary ページ 2」（URL : <http://www.teuri.ed.jp/gaiyou/unimachi/unimachi02.html>）

由から、これらが統合され、1985年に「島民大運動会」へと名称が改められた。ちびっ子ランドの園児・小学生・中学生・高校生、そして島民それぞれが活躍できる、様々な競技から成り立っている。どのような競技を行うかは、天売高校の生徒が中心となって考えている。小中高生は、自分が競技に出場していないときは、審判係・記録係・放送係・用具係などの係りの仕事を、それぞれ担っている。高校生が参加する競技としては、「100m 走」、教員との合同チームで戦う「天高ガチリレー」、中学生とともに「3 色綱引き」、なわとびや借り人がある「天売フレンドパーク」などがある⁴³。

また、「地域の祭典」と呼ばれる厳島神社の祭典も行われている。朝、地域住民が御神輿を担ぎ、島内の各町内会を回り、夕方には境内に戻ってくる。神輿担ぎの若い衆の半数は、高校生と教員である。高校に通う高校生と教員たちがいなければ、成立しない行事と言っても過言ではないだろう。他にも、天売体育協会が主催する、バドミントン大会と卓球大会がある。天売高校の教員がこの事務局を担当し、生徒がボランティア活動の一環として、会場設営・受付・表彰・片付けを行っている。

ここにも、学校と地域の密接なつながりがうかがえる。教員や生徒が地域の行事にも精力的に取り組むことで、地域と学校の支え合いが成立しているのであろう。

③天売高校と地域のつながり

天売高校では、2005 年度から地域の生涯学習センターの役割を担うという目的から、一部科目履修制を導入している。2016 年度は、「書道」と「社会と情報」が開講されている。この案内は、郵便局やフェリー乗り場など、地域住民が集う場所に貼られており、12 人の地域住民が生徒とともに学んでいる。

情報処理の授業は毎週水曜・金曜（祝祭日除く）の週 2 回、パソコンの基礎・文字の打ち方・ワープロ文書作成・表計算ソフトの活用・写真の加工・年賀状や家計簿の作成が行われている。授業料は年間 1500 円である。書道の授業は毎週月曜日（祝祭日除く）の週 1 回行われている。授業料は年間 750 円である。大筆・小筆は自費負担であり、文鎮・硯・墨汁・半紙などは学校のものを使用する。書道と情報処理のどちらも、4 校時目（19:25～20:10）に開校されている。これらの授業の中で作成された作品は、天高祭で展示をし、活動報告をしている。地域の人にも、活動が見えるように工夫されている。また、地域の人々は、書道・情報処理以外にも、天売高校で実施されているすべての科目の受講が可能である。郵便局やフェリー乗り場など、島民が集う場所に一部科目履修制の案内が貼られている。

また、学校開放講座も実施されており、一部科目履修制と同様に案内が貼られている。先に述べた天売学の案内や、サイクリング・料理教室などが行われている。例えば、「自転車ノススメ～自転車で島を一周しよう」は天売高校の教員が開講しており、自転車を楽しむための講義を受けた後、一緒に天売島を一周する。天売島は一周 12 キロ程度なので、自転車に乗れば一周することができる。また、沖縄料理教室も、天売高校の教員が開講していた。

地域に高校の教員がいることで、普段触れることがないような体験ができる機会が生まれてい

⁴³ 天売高校 HP「連絡船 学校通信 第 3 号」

(URL : http://www.teuri.ed.jp/_userdata/2016-8_gakkotsushin3.pdf)

る。その恩恵は、生徒だけではなく、天売島の住民全員が受けていると言っても過言ではない。天売高校としても、「地域の教育センターとしての役割は果たさねばならない」（インタビュー上田校長発言）という使命感を抱いている。

この他にも、高校の図書館は、羽幌図書館から定期的に入れ替えをしてもらっており、島の人々も利用することができるため、地域の図書館としての役割を担っている。また、高校だけではなく、天売小中学校の体育館で行われている「地域のバレーボールの日」などで小中学校の開放も行われている。天売高校だけではなく、天売小中学校も地域に開かれているのである。

以上をまとめると、地域との関わりの中で天売高校は、①行事の拠点、②生涯学習センター、の2つの役割を担っていると言える。高校は、「地域の高校」という位置づけのもと成立しているため、地域からの支えなしではなりたない。島外の生徒を受け入れてくれるのも、高校生の仕事のサポートをしてくれるのも地域の人々なのである。一方で、地域の行事も、高校なしには成り立たない。地域の行事を支える高校、生涯学習センターとしての役割を担う高校は、地域の方々の理解や支えがあって存続している。ここに、地域の小規模校独自の高校のあり方を見出すことができる。天売高校のような地域に根差し、地域との支え合いの下で存続してきたあり方は、今日の都市部の学校では実感することがなかなか難しい。しかし、地域ぐるみで子どもの成長を見守る天売島のあり方は、働きながら将来を見つめつつ学校に通うたくましさ、子どもの豊かな情緒とを育むのである。

2-4 小括

（担当：岩瀬優）

本章では、天売島の概要、天売高校の概要や特色、そして高校と地域社会との関係について概観してきた。これらを踏まえ、最後に過疎地域における小規模高校の可能性について検討していく。小規模高校であるからこそ可能となる特色のある教育内容の提供、そして、地域に根ざした学校としての存在意義、という2つの視点から天売高校の教育のもつ可能性について考えていきたい。

まず、天売高校が非常に小規模な学校であるという点について着目する。「目の前にいる子どもに対して先生方がしっかり関わっていくというのがうちの学校の売りであり、大前提」であると上田校長は語る。このように、少人数教育は天売高校の教育の最も大きな特徴の一つであると言える。少人数であるということを最大限に活かした、生徒一人ひとりに対応した授業・学習指導が天売高校では教師たちの間にある共通認識として目指されている。そこでは、教師と生徒との間に密接な関係が築かれていると推測される。さらに、天売高校の場合はそれだけにとどまらず、地域住民も行事や公開講座等を通して生徒とのふれあいの機会を多く持っている。「地域の方々が生徒たちを見守り、応援してくれている」と上田校長が語るように、高校は生徒・教師・地域住民のそれぞれが交流を持ち、つながりを深め合う場となっている。天売高校のような小規模校だからこそ、一人ひとりのニーズに合わせた教育、そして、人と人とが密接に関わり合う教育環境を生徒や地域住民に提供することが可能であると言えるだろう。

水産実習のような地域の基幹産業を活かした教育を行っていることも、天売高校の教育の大きな特色の一つである。普通科でありながらも、水産の科目を設置しているのは特殊な例と考えて

よいだろう。このように地域の資源を活用した、天売島でしかできない学習内容・機会を提供することができるのも、小規模高校であるという特徴が大きな背景となっている。

天売学の授業に代表されるような土曜授業も、小規模校ゆえに実現可能であるといえるものである。都市部の大規模高校においては、部活や講習等があれば土曜日に授業を行うこと自体が難しい。また、教師の休暇調整という面においても、休日に授業を行うことは難しいというのが多くの学校における現状である。

このように天売高校においては、都市部の一般的な普通科高校とは異なるさまざまな特色ある教育実践が行われている。これらの活動は、天売高校が小規模高校であるということの強みを最大限に活かしているからこそ可能になっていると言えるだろう。

最後に、「地域の高校」としての天売高校の存在意義について考察する。

第一に、天売高校が島の子どもの学ぶ権利を保障する重要な役割を果たしているということである。もし天売高校がなくなってしまった場合、島には高校がなくなってしまう、中学校を卒業した子どもたちは、進学するために天売島から出ていかなくてはならないことになる。そのような状況下では、高校に行きたくても行くことが出来ない子どもたちが生まれてしまう危険性がある。島に唯一の高校は、子どもたちの学ぶ権利を保障する重要な基盤の1つとなっているのである。

第二に、高校が地域の生涯学習センターの役割を果たしていることがあげられる。地域住民が参加できる公開講座が開設されていたり、図書館が住民に開放されていたりと、天売高校は天売島の生涯学習施設としての機能の一端を担っていると言える。また学習面に限らず、島民大運動会や天売高校学校祭などの様々な行事も学校と地域との連携のうえに成り立っている。このような行事は、地域住民同士が、また、学校と地域が交流を深める貴重な場ともなっている。様々な場面において、高校と地域は互いにとって欠かせないものとして存在しているのである。このことは、小規模高校において地域住民との交流が充実した教育機会を作り出す要素となっているということ、そして、過疎地域において地域の人々が集う一つの拠点として高校が重要な機能を果たしているということを示唆している。

第三に、地域の活性化という面において高校が果たしている役割についても見逃すことはできない。現在、北海道では札幌への一極集中化が進行しており、地方部の過疎化が深刻な問題となっている。その中であって、天売高校は「島留学」という形を提案し、島外からの若い人口を誘致することで、地域の高校存続、ひいては地域の活性化を目指している。「島外から来た生徒が天売で3年間生活を送って出て行ったときに、天売島をPR・発信してくれる役割、縁を広げてくれる役割を担ってくればありがたい」という上田校長の言葉に見られるように、卒業後、島に残ることだけが必ずしも天売島を支える方法ではない。天売高校での教育を通して育まれる島への愛着心は、たとえ島外に出たとしても生徒たちの中に残っていくものだろう。それが将来何らかの形で、島に対する貢献につながってほしいというのが、高校、そして島民の願いであると上田校長は述べている。

天売高校の将来像を考えるうえでは、少子高齢化の進行により、いずれ学校が立ち行かなくなるときがくることも予想しておかなければならない。「将来のことを考えるからこそ、いまこの学校をなくしてはいけない」と上田校長は語る。その背景には、地域から学校がなくなってしまう

た場合、天売島の疲弊、過疎化はますます加速してしまうという危機感がある。天売島と焼尻島の高齢化率を比較すると、2011 年の天売島の高齢化率は 42.1%、同年の焼尻島の高齢化率は 52.9%であり⁴⁴、両島の高齢化率には約 10%の差がある。焼尻島は 1979 年に高校が閉校しており、ここに見られる高齢化率の差は、高校の存在が大きく関係していると考えることができる。

特色ある教育や島外の若者の誘致をはじめとする天売高校の実践は、単に「高校の存続」という一つの目的のためだけにとどまるものではない。島の将来を見据えたうえでの、島の魅力向上や地域の活性化といった複数の目的意識から支えられているものであるといえる。その意味で、天売高校の教育実践は、町・島を維持し活性化させていく 1 つの舞台としての高校の役割を示唆していると言える。

また、小規模校でも存在するだけで意義・可能性があることを考慮したときに、人数に合わせた高校適正配置基準の抱える矛盾、教員配置の抱える課題が明らかとなる。天売高校では、常駐の養護教諭の不在や、特定の授業が行われていない現状、臨時免許状の授与による教科の設置など、超小規模校だからこそ抱える教員配置の難しさがある。これらの状況をどのように捉え、どのように補っていくのかは課題であるが、果たして、生徒の人数による教員配置は、小規模校の教育の質を保障できているといえるのだろうか。学校の規模にかかわらず、教育の質は保証されねばならず、これまで見てきたように、小規模校といえども学校が存在するだけで意味があることは、学校の統廃合を考える際に一定の示唆をもっている。

第 4 章 天売島の住民と地域おこし

本章ではまず、調査時に併せて行った島民へのインタビューから、天売島の現在の様子を検討する（1 節）。そして、島民の中でも、一般社団法人おらが島活性化会議（以下、「おらが島活性化会議」と略記）の取り組みを概観し（2 節）、天売島の地域おこしの今後の展望について考察する（3 節）。

4-1 天売島民への聞き取りによる島の現状 （担当：平子裕）

（1）島民へのインタビューの概要

本節では、島民への一対一のインタビュー調査に基づき、島民の語りから島の現状を明らかにする。聞き取った内容は、その場でフィールドノートに書きとって記録した。調査協力者は計 9 人であり、天売島出身者は 3 人である。島民の語りから現れるそれぞれの意見の相違点や共通点などについて、①天売島の印象、②天売高校について、③島に子どもがいること、の 3 つに分けて整理する。

①天売島の印象

天売島の主産業は漁業である。島内には商店がいくつか残っているが、天候状況次第では商品

⁴⁴ 北海道羽幌町（2013）『羽幌町離島振興計画（平成 25 年度～平成 34 年度）』p.4

が品薄になるため本土への食糧調達が必要となる。さらには、高校生を代表する若い世代が進学や就職で島を出てしまうことを始め、過疎化や高齢化の問題も大きく取り上げられている。このような天売島の現状に対して、「確かに食料などの資源はないが、人は温かいし食べ物は美味しい、空気は綺麗」、「不便さは感じるが、最低限のものはある。さらにこの島には独特の文化があり、地域の人は大体知り合いである」と語っている。これらの発言からは、食料のような「資源」の少なさを認識する一方で、人とのつながりの緊密さが島の「資源」として肯定的に捉えられていることがうかがえる。

②天売高校について

町立の夜間定時制として運営される天売高校は、地域づくりと深く関わった教育実践や、それらを積極的に PR した島外からの入学者募集を進めている。地域の人々にとって学校は開かれた場となっている。高校は「地域に開かれた学校」として機能しており、休日に校舎を開放しママさんバレーやパソコン教室を開いて校舎を地域の生涯学習の場としたり、島民一丸となって天高祭を行ったりなど、地域の学びと交流の場になっている。このような行事以外にも、天売高校の生徒は島で働きながら学ぶため、日常的に生徒が島民と協働をする仕組みがある。

このような特徴を持つ天売高校に対して、島民はどのような印象を持っているのだろうか。ここでは特に、現在天売高校が力を入れている「島外から生徒募集をすること」に焦点を当てインタビューを行った。インタビューができた3名（天売島出身者）とも共通して、島外からの生徒募集には賛成であり、自分たちが卒業した天売高校を残したい、失いたくない、という意見をもっていることがわかった。このような発言を裏付けるように、天売島では、旅館経営者が島外から入学する生徒のために宿の一室を下宿先として提供しており、地域おこし協力隊の中心メンバーが開設したゲストハウスの一部を島外出身者の受け入れ先にしようと動いている。この他にも、働きながら学ぶことを望む生徒のために、仕事の場の提供も地域住民側から旅館や観光案内所を中心に行われている。

このような地域と学校の連携により、天売島では天売高校の島外からの進学者募集や、おらが島活性化会議の島外からの人材募集を積極的にサポートする組織の活動が共鳴し、地域活性化を進める足場が着実に形成されている。

③島に子どもがいること

天売島の保育園（ちびっこランド）・小中学校に子どもを通わせている保護者たち⁴⁵⁾によれば、「地域ぐるみの子育て」が天売島の特徴として挙げられるという。ちびっこランドでは、正規の職員以外に天売高校の生徒が3人働いており、保護者は「しっかりと子育てしてくれている」と、高校生の子育ての能力を評価している。また、天売島ではちびっこランドに留まらず、島のどこにいても顔なじみのおじいちゃんおばあちゃんが子どもの面倒を見てくれている、と安心感を抱いている。

そして、子どもの存在によって、島外出身者たちが地域とつながるきっかけを生み出している。

⁴⁵⁾ ここでは3名の保護者にインタビューを行った。なお、3名とも島外出身者であり、仕事の都合で転勤していた。

天売島に来て6年・10年になる保護者の方によれば、最初の数年間はなかなか地域に馴染めずにいた⁴⁶が、地域の人々の子育てに対する姿勢がきっかけとなり、子どもの存在を介して地域の人々とのつながりを深めていった、という共通した認識が見られた。島に来て最初のうちは不安や困難を抱えるが、周りの人の支えがあって徐々に島民たちと馴染んでいくという経過が見られた。また、自分の子どもをもたない島民も同様に、子どもを通して島の人々とのつながることができたと述べていた。

このように、島の子どもは島のみinnで育てるという雰囲気が天売島にはしっかりと根付いており、子どもの存在が島での人間関係形成にとっての重要な糸口となっている。

（2）考察——天売島の現状認識の地域活性化への位置づけ

以上のような島民への聞き取り調査により明らかになった島の現状認識から、①地域活性化を助ける「資源」、②学校と地域の信頼構築、③子どもを軸にした世代間交流、という3つの観点から、天売島の地域活性化について考察する。

①地域活性化を助ける「資源」

地域活性化において、その地域の「資源」認識という問題は重要である。結城登美雄は、「資源」を「持ち出せる資源」と「持ち出せない資源」の2つ分けており⁴⁷、天売島における調査からも、島民は人間関係のような「持ち出せない資源」を重視し、島外から来た人々も次第に獲得していくことがうかがえた。天売高校における島外からの生徒募集や、一般社団法人おらが島活性化会議のIターン・Uターン者を増やす動きは、「持ち出せない資源」を外部にPRした田園回帰の事例とも考えられる。しかし、単に「持ち出せない資源」だけを強調し、外から人が来てもらえる地域づくりをすればよいわけではない。佐藤一子が述べるように、「異業種」「よそ者」「子ども・若者」のような多種多様な属性の人々との出会いによる文化交流空間の学び合いが重視されねばならない⁴⁸。島により多くの人に来てもらえるような働きかけを、今後どのように展開していくかが、天売島の地域活性化の重要な鍵となっている。

②学校と地域の信頼構築

①では、田園回帰の事例として天売島の実践を紹介したが、その動きは、天売高校やおらが島活性化会議が単独で達成したものではなく、地域が一体となって達成したものである。島外からの進学者が生活する場所をゲストハウスや旅館の一室を提供して確保したり、働きながら学ぶための生徒の働き口を地域住民が提供したり、おらが島活性化会議による地域ブランディングを天売高校の生徒の力を借りながら行ったりする動きは、まさに地域が一体となった例である。

このような連携が可能になった主な要因は、その核となっている天売高校に対する地域からの

⁴⁶ 天売島に来て半年もたっていない保護者は、「病院などの面で島は不便。人とのつながりをつくるのも大変だし、いまのところは天売島にずっと住み続けていたいとは思わない」と語っており、まだ島での生活に不安がうかがえた。

⁴⁷ 結城登美雄（2009）『地元学からの出発 この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』農産漁村文化協会

⁴⁸ 佐藤一子（2016）『series 田園回帰⑦ 地域文化が若者を育てる 民族・芸能・食文化のまちづくり』農山漁村文化協会

認識である。天売高校は地域に開かれた学校として、土曜学校の開催や天高祭を地域住民と共同で行っている。仲田康一によれば、学校運営協議会の学校応援組織への堕落や形骸化の背景には、保護者・地域からの継続的な信頼や学校運営への理解の獲得の困難さがある⁴⁹。しかし、天売高校と天売島の関係のように、日頃から学校と地域が相互に信頼獲得に努めることで、学校と地域の協働が可能となり、それが学校づくり・地域づくりの推進力となるに違いない。

③子どもを軸にした世代間交流

インタビュー調査から、島民にとって子育てとは地域が一体となって関わっていくものであるという認識が確認された。また、多くの島外出身者にとってそのような島民の子育てに対する意識は、コミュニティに入り込むきっかけになっている。そこでは、子どもが自分の子どもかどうかということは問題とはされない。天売島にいる子どもは島の子どもなのである。

このような「地域ぐるみの子育て」は、近年日本でその減少が危惧されている世代間交流の空間であるとも言える。天売高校の生徒がちびっこランドで働きながら子どもたちと接する場面や、天売小中学校の行事を天売高校の生徒がサポートする場面、天高祭の催し物を天売小中学校の子どもたちが体育館の最前列で観賞する場面、また、その催し物に地域住民が参加する場面など、活発な世代間交流の軸には子どもの存在があることが、今回の調査で天売島の特徴として確認された。

全国的に、図書館や公民館、児童会館などの特定の場所に人が集まり、世代間交流が行われる事例は珍しくない。しかし、天売島における世代間交流は特定の場所で行われるのではない。学校・旅館・観光案内所といった施設に限らず、海辺や道路までもが、様々な場面で世代間交流の場となっている。子どもが集まる場所を軸とするのではなく、子どもの存在自体を軸とする天売島のコミュニティは、このような柔軟な世代間交流を生み出し、新規参入者が馴染みやすい環境をつくっていると考えられる。

4-2 一般社団法人おらが島活性化会議と天売島の活性化

(担当: 木村裕)

これまでは、天売高校を中心として分析・検討を進めてきたが、天売島自体を活性化させることも、高校の存続につながると考えられる。そこで、「おらが島活性化会議」という天売島の一般社団法人を対象としてインタビュー調査を行った。インタビュー時には、①この組織を作った理由、②おらが島活性化会議のこれまでの活動、③島の一般的な住民とおらが島活性化会議との意識の差、④島における高校生を含んだこどもの存在意義、重要性、⑤天売島から見た羽幌町、⑥天売島の将来的な展望、などを質問した。

本節では、このインタビューによって得た話に基づき、おらが島活性化会議が具体的にどのような活動をしており、その活動が天売島にいかなる影響を与えているのかを、天売高校との関わりにも触れながら考察していく。

⁴⁹ 仲田康一 (2015)『コミュニティ・スクールのポリティクス 学校運営協議会における保護者の位置』勁草書房

（１）一般社団法人おらが島活性化会議の概要

①おらが島活性化会議の成り立ち

おらが島活性化会議は、2012年に結成された一般社団法人である。その結成のきっかけは、羽幌町の人づくり事業補助金を利用した島根県海士町への見学である。人づくり事業補助金とは、「羽幌のまちづくりのための人材育成を目的に地域活動を積極的に行う人や団体に対し、その事業にかかる費用の一部を助成」⁵⁰する制度のことである。これを利用して海士町に行ったメンバーを中心に、天売島を活性化させるために集まって組織されたのがおらが島活性化会議である。メンバーは12名であり、代表理事を務めているのが齋藤暢氏である。メンバーの構成は、理事3名（無報酬）、社員6名（無報酬）、職員3名（有報酬）となっている。職員のなかで、報酬に関する差があるのは一般社団法人であることに関連している。理事や社員は運送業や漁業など他の職業を本職として持っている。無報酬で活動することの理由を齋藤氏は、「島民の信頼を得るため」と語る。お金を儲けることを目的とする活動にならないことが重要なのである。

おらが島活性化会議を作った理由に関して、齋藤氏によると「この島は、高齢化・人口流出も進んでいる。だが、この島の環境はとても素晴らしいものであり、その環境のもとで自分たちは育ってきた。……いまは自分の子どもが生まれて、新しい世代が成長しようとしている。その世代がこの環境を知らずに成長するのはもったいない。この島で快適に、この環境で成長できるようにしてほしい。……新しい世代へはそんな島を引き継いでいきたい。そういった意味合いを込めてこの組織を作った」としている。こういった理由は、どの地域でも言えるようなものにもなりえる。「郷土愛」という言葉で表現されるように、住んだ地域を愛し、次世代に引き継いでいきたいという思いはどこにも共通するだろう。

ここで重要な点は、島内出身者が中心となって組織化したことにある。過疎化に苦しんでいる地域は日本にいくつも存在する。この中には、「何かをしなければこの地域はダメだ、だからこそ何かをしよう」という地域と、「何かをしても無駄だ、そのうち衰退していくのだろう」という地域の大きく2つがあるように思われる。現在、総務省が主導する「地域おこし協力隊」制度を活用した事例が数多く報告されているが、齋藤氏は、まずは、天売島として独自の組織を生み出すことを選んだ。実際に活動するということは難しく、齋藤氏も「何かをやらなければならないという意識はあった。でも、何をしたらいいかわからなかった」と述べている。このように考えている人や地域は多いのではないかと考えられる。そうした中で、地域の理解や協力を得ることは困難を極めるが、おらが島活性化会議は積極的に活性化に向けて取り組む先駆的な組織であると言える。

メンバーの中には、地域おこし協力隊や漁師、天売高校の高校生もおり、若者視点での地域振興も積極的に行っている。その活動は、羽幌町観光協会の支部である天売島の観光協会支部として行われており、独立した組織としてではなく、羽幌町全体の活性化にもつながっている。

②おらが島活性化会議の活動の展開

おらが島活性化会議の主な活動内容は、観光案内と新しい地域ブランドの創出である。観光案

⁵⁰ 「羽幌町人づくり事業補助金 | くらしの情報 | 羽幌町」
(URL : <http://www.town.haboro.lg.jp/kurashi/kouhou/hitozukuri.html>)

内に関しては、様々な工夫のもとで観光客の呼び込む方法を考えることや観光協会の窓口業務である。具体的には、他の島にはない天売島の特徴である「海鳥」を活かし、観光客を呼び込んでいる。また、天売高校の活動にも関わっており、島外生徒募集活動や水産実習・天売学のサポートなども行っている。

これまでの具体的な活動内容は以下の通りである⁵¹。

2014 年度	キャンプ場の新規開設・運営、天売島産の海産物を利用した商品開発、㈱CPS との連携（惣菜店 ヴィヴル・アンサンブル）、観光案内窓口業務の受託、羽幌甘えびまつり出店、札幌オータムフェスト出店、札幌羊ヶ丘展望台「天売ウニ祭り」の開催、ふくしまキッズ受け入れ、島内清掃ボランティア、独居老人宅除雪ボランティア
2015 年度	天売高校コラボ商品「天売ウニ缶」の製造・販売、フットパス草刈り業務受託、天売ネコ捕獲事業の受託、羽幌町モニター事業の受託（シーカヤック、ウニ獲り体験、星空観察）、町道草刈りボランティア、焼尻めん羊まつりボランティア
2016 年度	ゴメ岬清掃プロジェクト、天売島森林整備等活用プロジェクト、天売ネコ譲渡会 in 天売島の開催、提灯ナイトウォークの開催、しまっちんぐ 2016 への参加

図表 4-1 おらが島活性化会議の活動内容

ここでは、おらが島活性化会議の重要な転機となったと考えられる、①天売島産の海産物を利用した商品開発、②ふくしまキッズの受け入れ、③羽幌町モニター事業の受託、④ゴメ岬清掃プロジェクト、の4つの活動に注目したい。

おらが島活性化会議として最初に行った活動が、天売島産の海産物を利用した商品開発である。そして、その際に作られた商品がカレーである。これは海士町を参考にしたものであり、同じ漁師町として取り組みやすい事業として始められた。天売島産のあわびが具材として使われているインパクトは大きく、ネット販売され早々に完売するに至った。ここでの重要な点は、活動によるメンバーの士気の高まりである。この場合、発想が商品化というかたちで具現化したこと、さらに、それが実績として形に表れたことの2点が、組織の活動の最初の原動力となったのではないかと考えられる。

次に、ふくしまキッズの受け入れである。おらが島活性化会議は、もともと被災地の子どもたちを天売島に受け入れる「ふくしまキッズ」という企画があった。2016年度は、これに併せる形で北海道の子どもたちも受け入れ、るもい地域子ども農山漁村交流推進協議会が運営する「はっちゃキッズ」のコースの1つとして天売島ができた。これまで、天売島という1つの地域で完結していた事業が留萌管内のイベントに位置づき、他地域と共同できたことは大きな意味を持つ。これにより、羽幌町だけではなく、他地域へのコミュニティの拡大にもつながるだろう。はっちゃキッズの影響は天売島にとって、大きな意味を二つ持っている。1つは、子どもが天売島での経験を楽しんだことによって、それを保護者に話すことである。そしてもう1つが、将来、成長したときに天売島を思い出し、また島を訪れたいと思えるような経験をすることである。その経

⁵¹ 坂本氏からの提供資料より筆者が作成した。

験が天売島の印象をより良くし、その保護者と子どもが情報を発信するきっかけにもつながる。さらに、この企画のなかで重要な点は、地域住民の協力である。いくら組織として動いていても、場所や食事の提供など、ボランティアで補わなければならないことが少なからずある。このとき重要になることが、漁協の協力である。漁協が中心である島では、企画を実施するにあたり漁協の協力が不可欠となる。協力を得た上で企画を進めることで、島全体の共同意識がより強まったのではないかと考えられる。

また、羽幌町モニター事業を受託したことも、おらが島活性化会議の展開にとって重要な意味をもっていた。天売島の注目すべき特徴の1つが、星を観測するのに適した環境である。天売島は空気のきれいで、水平線がはっきりしており、街灯の数が少ない。こういった環境を観光に生かした企画が宇宙塾である。星に関しては、地域住民にとって、漠然ときれいであるという感覚しかなかったという。しかし、天売島の外からやって来た観光客の様子によって、それがいかに珍しく特殊な条件であるかを知り、それを生かした観光事業を起こすこととなった。このように、ある地域に長くいると、その地域特有の良さに気付きにくく、当たり前という感覚に陥ってしまう。外部の視点をきっかけに自分たちの地域の良さを知り、それを生かした町おこしができるようになった良い事例である。

最後に、ゴメ岬清掃プロジェクトである。ゴメ岬は海洋漂流ゴミの溜まりやすい場所であり、その清掃活動が2016年に行われた。一見、観光事業に関わっていないような企画であるが、この企画も大きな意味をもっている。1つは、次世代への引き継ぎという点である。もう1つは、商工業者とのつながりである。天売島にはない事業を請け負っている業種とのつながりは、他の事業を展開するきっかけとなりえる。

天売島の重要な観光資源として海鳥の生息地が挙げられる。魚介物にも付加価値はついているが、北海道には他にも様々な魚介の産地が存在しているため、競争率が高い。天売島に生息する海鳥の種類は全8種類であるが、このような小さな有人島にこれだけの種類の鳥が生息することは珍しく、他に例を見ない。このように、天売島には海鳥をメインに観光資源の売り出しを行い、それに関わる人々が多い。そして、この観光を請け負っているのが、おらが島活性化会議なのである。この他にも、北海道旭川市で行われる「食マルシェ」のような出店型のイベントは、得るものが多く、おらが島活性化会議にとって貴重な場となっている。「こういったイベントの良いところは、ほかの地域の出店を見ることができることや、協力を求める地域とのつながりを作れることがある」と、齋藤氏は述べる。

おらが島活性化会議は、観光業をメインとして活動しているが、活動の多くは草刈りや雪下ろしなどの雑用であったり、天売島に住み着いた猫を捕獲したりすることなどである。こうした業務を地道にこなしつつ、おらが島活性化会議として観光窓口の仕事を行っているのである。

（2）天売島の活性化に向けた挑戦

天売島は、夏は素晴らしい環境下であるが、冬は厳しく、フェリーも1日に1便しかない。それだけではなく、不便な環境下であるため、少子高齢化も進んでいる。おらが島活性化会議の先駆的な活動は、このような島の厳しい環境を打破する役割を担っていると考えられる。ここでは、おらが島活性化会議の地域コミュニティの關係に着目して、その可能性と課題を考察する。

①おらが島活性化会議と地域

今回のインタビューで明らかになったことの1つは、おらが島活性化会議と島民との意識の差である。齋藤氏は、天売島と比較して島根県海士町の取り組みは「まちの取り組みがすごいって、いか、まちの人の意識が全然ちがう」と述べている。隠岐島前高校を中心とするコミュニティをつくり出してきた海士町の取り組みは、離島の先進的な取り組みとして挙げられる。その一方で、これまで天売島はそういったことに関心なく、高校の存続に関する意欲が海士町ほど大きなものではなかった。羽幌町でのアンケート調査の際に、天売島の改善して欲しいテーマとして、島に十分な医療を受けるためには羽幌町へ渡らなければならないこと、フェリーの値段が高いことを挙げている。このように天売島に対して、不満を持つ島民は少なくない。

これまでの天売島は、島全体で町おこしを積極的に行おうという意識は、決して高かったわけではない。例えば、おらが島活性化会議に対して漁協からは「なんであいつらが、漁業者の扱うものを使ってお金を儲けているんだ、って言う人もいる」と齋藤氏は語るように、活動に疑念をもたれていたらしい。齋藤氏が「自分たちがなんかやろうって考えてなければ、町も動かないな」と述べるように、天売島や羽幌町を動かすには、自分たちが率先して行動し、関係する人々にも上手くはたらきかけなければならない。その点で、海士町は島全体が魅力化に向けた動きを示していることに、齋藤氏らも刺激を受けている。

天売島の状況は、おらが島活性化会議の積極的な活動によって変化してきている部分もある。それが先に述べた、はっちゃキッズやゴメ岬清掃プロジェクトへの協力である。この動きにより、地域住民がおらが島活性化会議の活動を認知し、直接携わろうとする関わりになったのではないだろうか。おそらく、おらが島活性化会議のなかった頃とは異なり、島全体が変わるきっかけになりえるのではないかと考えられる。

おらが島活性化会議の活動方針は、単に人を呼び込むということだけではない。現状の環境を次世代に引き継ぎ、それを残していくことである。人を呼び込む活動は、人口の増加と島の活性化に直結しているために行っている。次世代に環境を引き継いでいく活動は、例えば、島の環境を整備することや雇用の創出などである。雇用の創出のためには資金が必要であり、その資金も観光と漁業がメインとなる。観光と漁業がマッチングしていくことが天売島には必要である。

②地域における子どもの存在

ここまで、おらが島活性化会議の活動に対する考察を行ってきたが、天売島民にとって、天売高校という存在は、どのようなものであるのだろうか。高校の魅力化に関して、天売高校は島根県海士町の隠岐島前高校の活動を参考にしている。隠岐島前高校は、町の支援により、低額の学習塾を設置することで勉強面を充実させ、島外への進学率を上げた。実際に国立大学への進学者を送り出したことにより、島外からの入学希望者が増加して注目されるようになった。

ここで重要な点は、地元の高校の意義を冷静に分析することである。齋藤氏は、「天売高校の特色ってなんだっていうと、やっぱり働きながら学ぶっていうこと」と述べている。この特色は周囲の高校がどのように活動しているのかという点を知らなければ気づくことはない。自分たちの住んでいる地域を客観視することによって、その存在価値も認識されるのである。天売島民にとって、天売高校の特色である働きながら学ぶことは、どのような意義があるのだろうか。齋藤氏

は「島の人も（高校生たちを：引用者註）労働力として扱いやすいんだよね。まともに年間雇用するって大変なんだけど、高校生がいることによって、漁が忙しいときには、漁の手伝いもしてくれるし、観光が忙しいときには観光の方を手伝ってもらえたり。実際、いまの5人の子達は小中学校の用務やってたり、地域のおらがで働いてたり、あと3人は地域の保育所で働いてたり、給食センターで働いてたり、ホタテの漁師さんが「欲しい」って言ったり。高校生の働くニーズってというのが、まだあるんですよね」と述べる。高校生が柔軟に対応できる労働力として重宝されている様子がうかがえる。

天売学・天高祭・運動会など、高校と地域のつながりは多い。こうしたつながりは、島において重要である。それは、子どもを島として教育すること、高校が地域の生涯学習を行う中心的な場となるからである。高校の存在が島民全体が集まるきっかけにもなる。こうしたきっかけが、島の発展の鍵となり得るのだ。だからこそ、おらが島活性化会議は高校生をメンバーとして受け入れ、活動を行っているのである。高校生の役割はこのように形づくられているのである。

子どもが少なくなった瞬間、地域としての活動が止まってしまうことをおらが島活性化会議はわかっている。そのことを踏まえた活動をこれからも期待したい。

4-3 小括

（担当：平子裕）

最後に、これまで述べてきた天売島の特性を踏まえ、天売島の地域おこしの今後の展望について検討する。

はじめに、地域おこしの中心的役割を果たす天売高校についてである。おらが島活性化会議の齋藤氏は、天売高校の役割を焼尻島の焼尻高校の廃校という現実と対比させて捉えている。羽幌町の公式ホームページによると、天売島の人口が約300人であるのに対し、焼尻島の人口は約200人と、約100人の差が生まれている。島の面積もそれほど大差ない2つの島において、何がこの100人の人口差を生み出しているのか。齋藤氏はこの要因について、「40年前くらいに焼尻高校がなくなっているんだけど。高校があったかなかったかで、その差がやっぱりついたんじゃないかなってすごい感じてるんですよね」と語っていた。実際に、焼尻高校が廃校になったのは1979年のことであり、それ以降、人口減少は加速していつている⁵²。もちろん、このような人口差が生まれた原因を、高校の有無に帰することはできないが、天売島を活性化させようと動いている中心人物が、このような背景も踏まえて高校存立の意義を見出していることは注目に値する。

では、単に島の人口減少に歯止めをかけるために島外からの進学者募集を行い、高校を存立させようと努力しているのかというと、実はそれだけではない。おらが島活性化会議の活動は、同じように離島における地域活性化を成功させたモデルとして、島根県海士町の隠岐島前高校の実践から学んだ部分が多かった。海士町は、現在天売島が直面している問題と同一ような経験をし、それを隠岐島前高校の活動などを通して乗り越えている⁵²。

これを踏まえて、齋藤氏のインタビューを分析すると、①高校の「魅力化」と「存続」の優先順位、そして、②学校の文化の保持、という2つの重要な点が浮かび上がる。まず、高校の「魅力化」と「存続」の優先順位についてである。「存続」の問題があるのは確かだが、そればかりを

⁵² 山内道雄・岩本悠・田中輝美（2015）『未来を変えた島の学校 隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』岩波書店

優先してしまうと、一時的な解決に過ぎなくなることが危惧されている。しかし、本来優先すべきことは高校の「魅力化」である。学生が本当に通いたい、学びたいと思える高校づくりが、「存続」につながるのだと山内ら（2015）は述べている。齋藤氏もまさにこの視点を取り入れており、「高校を存続させるためには生徒を呼ぶっていうんじゃなくて、親がこの高校に行かせたい、子どもがこの高校に行きたいっていう魅力がある高校づくりをしましょう、ていうふうに取り組んできたっていう話をきいたんだよね」と述べていた。おらが島活性化会議は、天売高校の魅力を「働きながら学ぶ」とし、それらを積極的に外部にPRしていった。この点がまさに学校の文化の保持を表している。そのためには、あらかじめ募集する側が一定の制限を加えておかねばならない。天売高校の場合は、「働きながら学ぶ」ということだったのである。

これに加えて、天売学や水産実習のような、高校での特色ある授業についても触れておきたい。天売高校の特色には、地域の理解を深める天売学や、特産品の加工方法を学ぶ水産実習などもある。さらに、天売高校は校舎の開放を行い地域の人の学びの場として学校を提供したり、地域の人々が参加者となる天高祭があったりなど、地域の生涯学習センターとしての機能をもっている。これは、学校の島外からの生徒募集に地域住民が共鳴できた大きな要因となっている。

また、天売島の地域おこしにおいて子どもの存在が果たす役割は大きい。転勤などで天売島に移り住んでくる新規参入者にとって、島の子どものコミュニティに馴染むきっかけとなる例が数多く見られた。子どもの存在は、単なる島の将来の担い手としてだけでなく、人間関係形成のきっかけとしても重要なのである。

以上のことから、天売島の地域おこしの今後の展望を考えると、天売高校と島の子どもの地域おこしにどのように絡めていくかが非常に重要な課題であると言える。天売高校の魅力化とは、天売島全体の魅力化でもある。また、島の子どもの大切にすることは、自身を取り巻く人間関係を大切にすることにもつながる。存続に向け島外からの力を借りる必要性が出てきたこの段階においてこそ、まずは天売高校と島の子どもの存在意義を再確認する必要がある。

第5章 本調査のまとめ

（担当：高嶋真之）

本報告書では、天売高校・天売島を対象として、地域における高校の存在意義を探るとともに、それを支える自治体・地域住民の取り組みを明らかにしてきた。最後に改めて、その要点を整理していく。

まず、天売高校の教育実践については、少人数であることを活かしたきめ細やかな教科指導・進路指導が行われている。それに加えて、普通科でありながら水産実習や天売学を設けることで、地域に根差した天売高校でしかできない学びが実現可能となっている。確かに、同様の取り組みは小中学校でも少なからず行われているだろうが、より専門的で高度な実践が可能となるのみならず、島内外出身者が一緒に学ぶことで多様な考え方や価値観に触れることができる。これにより、天売島がもつ歴史・文化・伝統が次の世代に継承され、地域の維持・発展へとつながっている。また、天売高校があることで、学ぶ権利が保障されているのは高校生だけではない。一部科目履修制や学校開放講座を通して、地域住民の学ぶ権利も保障されており、高校が地域の生涯学習の場として機能している。特に、情報・書道・天売学では、高校生と地域住民が一緒に学んで

いることを考慮に入れば、全校生徒の数だけで学校の規模を測ることは、高校の果たしている教育機能を矮小化して捉えることになっていると言わざるを得ない。

そもそも、地域に高校があることで、その地域で生活する人、特に、地域で生活する若い人が増える。これにより、地域の様々な活動を維持・展開が可能となっている。例えば、天売高校の生徒や教員は、天高祭・島民大運動会・厳島神社の祭典といった天売島の行事に参加するだけではなく、企画・運営にも携わることで、地域を盛り上げようと努めている。また、天売高校の生徒は、地域の貴重な労働力でもあり、天売島に欠かせない重要な役割を各持ち場で果たしている。仮に、天売高校がなくなった場合、これらの担い手がいなくなってしまうため、地域に大きな影響を与えることになるだろう。それだけではなく、生徒が地域から必要とされていることを実感する機会や、学校だけではなく地域の中から学び、豊かな経験を積み重ねていく機会を奪うことになってしまう。

このように、天売島の中で天売高校が果たしている役割・機能は多岐にわたっており、学校は地域にとって不可欠な存在となっている。ただし、以上のことは地域からの協力があってこそ可能となる。例えば、天売学では地域の方が講師として授業を行っており、生徒の働く場所も地域の各所からの提供に負っているところが大きく、様々な学校行事・活動も地域住民の参加があってこそ実現される。また、地域住民の中でも、強い問題意識をもった有志により組織されたおらが島活性化会議の取り組みは、高校の魅力化のみならず、地域の魅力化にも大きく貢献していることがうかがえる。この意味で、天売高校と天売島は相互の支え合いの上に成り立っていると言える。そしてさらに、この重要性を行政が的確に認識し、それを支援する体制が整えられている。特に、生徒募集については、天売高校の存続に向けて学校・行政・地域住民が一体となって進められており、一定の成果をあげている。

人口減少と少子高齢化が進む今日、地方の小規模の公立高校が置かれる状況はますます悪化し、統廃合の危機にさらされることが予想される。その中であって、全校生徒5名という超小規模高校でありながら、現在まで維持され続けている天売高校の姿は、全国で統廃合の危機にある高校にとって希望となるに違いない。このような高校の存続・魅力化に向けた学校・行政・地域住民の取り組みに注目が集まっているが、今後も引き続き様々な事例を収集し、その可能性と課題について検討していくことが、これから先の高校教育を考えていく上で急務となっている。

〔付記〕本調査の実施にあたり、北海道天売高等学校、一般社団法人おらが島活性化会議、羽幌町役場・教育委員会の皆様には、快くインタビューや資料提供に応じていただきました。ここに記し、厚くお礼申し上げます。